奈良文化財研究所・奈良県立橿原考古学研究所　公開講演会

世界文化遺産
登録記念

ここから日本の都城がはじまった

―発掘調査が解き明かす「飛鳥・藤原の宮都」―



藤原宮大極殿院跡

世界文化遺産
登録記念

奈良文化財研究所・奈良県立橿原考古学研究所

公開講演会

ここから日本の都城がはじまった

―発掘調査が解き明かす「飛鳥・藤原の宮都」―

12:00　開　場

12:30～12:40　開会挨拶

12:40～13:10　講演１「発掘からみる飛鳥の寺院と古墳」
奈良文化財研究所 都城発掘調査部 主任研究員　若杉 智宏

13:10～13:40　講演２「橿考研による飛鳥発掘の軌跡」
橿原考古学研究所 調査課 指導研究員　鈴木 一議

13:40～14:10　講演３「飛鳥宮跡における発掘調査の最前線」
橿原考古学研究所 調査課 主任技師　黒澤 ひかり

14:10～14:40　講演４「藤原宮跡における近年の調査成果と意義」
奈良文化財研究所 都城発掘調査部 研究員　岩永 玲

14:40～15:00　休　憩

15:00～15:40　対　談「はじまりの地、飛鳥・藤原
―世界遺産「飛鳥・藤原の宮都」の魅力とは？」
奈良文化財研究所 所長　本中 眞・橿原考古学研究所 所長　青柳 正規
（コーディネーター：奈良文化財研究所 企画調整部長　神野 恵）

15:40～15:45　閉会挨拶

15:45　閉　会

奈良会場

第135回　奈良文化財研究所公開講演会
第 46回　奈良県立橿原考古学研究所公開講演会

日　程：令和８年 11 月３日（火・祝）
会　場：奈良県社会福祉総合センター
主　催：独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所
奈良県立橿原考古学研究所
(公財)由良大和古代文化研究協会

東京会場

第16回　奈良文化財研究所東京講演会
第16回　奈良県立橿原考古学研究所東京公開講演会

日　程：令和８年 11 月 15 日（日）
会　場：有楽町朝日ホール
主　催：独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所
奈良県立橿原考古学研究所
(公財)由良大和古代文化研究協会
朝日新聞社

目　次

ごあいさつ …… 2

開催に寄せて …… 3

講演者紹介 …… 4

講演１　発掘からみる飛鳥の寺院と古墳 …… 若杉　智宏　5

講演２　橿考研による飛鳥発掘の軌跡 …… 鈴木　一議　11

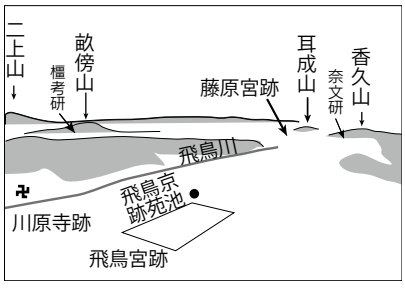
講演３　飛鳥宮跡における発掘調査の最前線 …… 黒澤　ひかり　17

講演４　藤原宮跡における近年の調査成果と意義 …… 岩永　玲　23

世界文化遺産「飛鳥・藤原の宮都」 …… 29

主催者紹介 …… 32





飛鳥宮跡上空から藤原宮跡をのぞむ（世界遺産「飛鳥・藤原」協議会提供）

ごあいさつ

このたび世界遺産登録を記念して、奈良と東京の２カ所で奈良県立橿原考古学研究所と合同で公開講演会を開催することが叶いました。国家としての日本のはじまりの地である奈良と、現在の国家の中心地であります東京で、飛鳥・藤原の宮都に関する両研究所の調査・研究の成果を発信する機会を得たこと、たいへん意義深く、嬉しく思っております。

奈良文化財研究所は国の機関として、飛鳥・藤原の宮都に関わる遺跡の調査研究をおこなってまいりました。飛鳥・藤原の宮都は、構成要素の多くが地下に眠る「遺跡」です。遺跡の本質的価値を明らかにするためには、発掘調査と出土した遺物、遺構についての調査研究が必要不可欠です。しかし、地下に眠る遺跡を来訪者にわかりやすく伝えることは難しい課題を抱えているのが現状です。

飛鳥・藤原の宮都が世界文化遺産に登録されたことは、決してゴールではありません。文化庁、奈良県をはじめ、橿原市、桜井市、明日香村などとも協力しつつ、その価値を来訪者に伝える務めをしっかりと果たしていきたいと思います。

本日の講演会にご参加いただいた皆様に厚くお礼申し上げますとともに、ご支援いただいた公益財団法人由良大和古代文化研究協会、朝日新聞社をはじめ、関係各位に厚く御礼申し上げます。この講演会をきっかけに、たくさんの方々に飛鳥・藤原の地を訪れていただき、「日本のはじまりの地」の原風景をご堪能いただければ幸いです。

独立行政法人 国立文化財機構　奈良文化財研究所
所長　本中　眞

令和８年（2026）７月 26 日、「飛鳥・藤原の宮都」が、世界文化遺産に登録されました。東アジアの古代国家の形成期において、中央集権体制が誕生した過程を示すものとして、その普遍的価値が国際的に認められたことを、心から喜びたいと思います。ここまで、地元の皆様をはじめ、多くの方々にご支援を賜りましたことに、感謝申し上げます。

橿原考古学研究所と奈良文化財研究所はこれまで、飛鳥・藤原の地域に所在する遺跡の発掘調査に長らく取り組んできました。橿原考古学研究所は石舞台古墳、高松塚古墳、橘寺跡などを調査したほか、昭和 35 年（1960）からは飛鳥宮跡の調査を継続的に行っています。これまでの発掘の成果により、飛鳥宮跡の遺構には３時期の重なりが認められることが判明しています。Ⅰ期は舒明天皇の飛鳥岡本宮、Ⅱ期は皇極天皇の飛鳥板蓋宮、Ⅲ期は斉明天皇の後飛鳥岡本宮、天武・持統天皇の飛鳥浄御原宮と考えられています。また、平成 11 年（1999）には、飛鳥宮跡内郭の北西において、大規模な苑池を発見しました。飛鳥時代に中国を中心とした東アジア諸国の都城制の影響を受けて苑池が営まれていたことを明らかにできたことも、重要な成果の一つです。

今回の公開講演会は、世界文化遺産登録を記念して、奈良文化財研究所と共催するものです。両機関による発掘調査の成果を広く知っていただくとともに、世界遺産や埋蔵文化財の価値について理解を深めていただく機会となることを望みます。

最後になりましたが、本講演会を共催いただいております公益財団法人由良大和古代文化研究協会、朝日新聞社、ならびに関係各位に厚く御礼申し上げます。

奈良県立橿原考古学研究所
所長　青柳　正規

開催に寄せて

令和８年（2026）の公開講演会を開催することになりました。今年のテーマは『ここから日本の都城がはじまった―発掘調査が解き明かす「飛鳥・藤原の宮都」―』です。

このたび、「飛鳥・藤原の宮都」が世界文化遺産に登録されましたが、構成する 19 資産の中には私がかかわった遺跡も含まれており、今更ながら時の流れを感じます。

なかでも強く印象に残っているのは、藤原宮跡の発掘調査です。戦前は日本古文化研究所によって行われ、大極殿を中心とする朝堂院地域が確認され、その一部が地元の鴨公小学校の敷地になっていました。

ふたたび藤原宮跡が脚光を浴びたのは、国道 165 号線橿原バイパスが内裏地域を含む宮域の北部を横断する計画が持ち上がったときです。すでに用地買収も進んでいましたが、奈良県教育委員会は調査班を編成して発掘調査にあたりました。調査は昭和 41 年（1966）から３カ年実施いたしました。私も調査班の一人に加えてもらい、現地での発掘調査と雑務を担当しました。幸いにも初年度で宮域の北方を画する大垣を、２年目で北東隅部を検出して、古文化研究所の調査で判明している藤原宮中軸線との間を測地して宮の南北間が確定し、３年目で西面大垣を調査して、藤原宮の宮域を確定することができました。そのつど橿原市高殿町の土地所有者の方々の承諾を得て、11 月中旬に発掘調査を開始、調査を終えた翌年３月には土地を返却して補償金を支払うのが私の業務でした。

今では、橿原考古学研究所の職員で藤原宮の発掘調査を経験したのは私だけになりました。

公益財団法人　由良大和古代文化研究協会
代表理事　　泉森　皎

このたび、「飛鳥・藤原の宮都」が世界文化遺産に登録されたことを、心からお喜び申し上げます。日本が古代国家としてかたちを整えた「はじまりの地」が、その普遍的価値を世界に認められたことは、報道に携わる者にとっても大きな喜びです。

奈良文化財研究所と橿原考古学研究所は 60 年以上にわたり飛鳥宮跡と藤原宮跡の調査を続けてこられ、その積み重ねが今回の登録の礎となっています。朝日新聞社は、その歩みを紙面で伝え、講演会やシンポジウム、展覧会を通じて、両研究所を長く応援しています。

奈良県には「古都奈良の文化財」、「法隆寺地域の仏教建造物」、「紀伊山地の霊場と参詣道」を構成する吉野、今回加わった「飛鳥・藤原の宮都」と、四つの世界文化遺産があります。朝日新聞社は、古都奈良では東大寺大仏奉賛会に参画し「東大寺文化講演会」や春日大社との「春日文化の杜講座」を続け、法隆寺では昭和 24 年（1949）に焼損した金堂壁画の一般公開を支援する「法隆寺みらいプロジェクト」を推進し、さらに吉野・熊野をめぐる紀伊山地の祈りの文化の取材・発信に取り組むなど、奈良の世界遺産を一体として支え、その価値を伝えてきました。

そうしたなかで、「飛鳥・藤原の宮都」に関する両研究所の研究成果を広くお伝えする本講演会を、世界遺産登録記念事業として主催の一員に加えていただき、大変うれしく思います。本講演会が、皆さまにとって「日本のはじまり」を見つめなおす一助となれば幸いです。引き続き、両研究所への温かいご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

朝日新聞社
専務取締役　大阪本社代表　堀越　礼子

講演者紹介

若杉　智宏（わかすぎ　ともひろ）

奈良文化財研究所　都城発掘調査部　主任研究員　1980年、愛知県生まれ

【主な論著】

「キトラ天文図描画方法の検討」『キトラ古墳天文図星座写真資料』 2016年

「甘樫丘東麓遺跡と乙巳の変」『文化財論叢Ⅴ』奈良文化財研究所学報第102冊　2023年

鈴木　一議（すずき　かずよし）

奈良県立橿原考古学研究所　調査部調査課　指導研究員　1981年、福島県生まれ

【主な論著】

「飛鳥時代庭園の様相―飛鳥京跡苑池を中心に―」『上野三碑の時代―７・8世紀の都と東国』 2022年

「飛鳥宮跡における最近の発掘調査成果とその検討」『条里制・古代都市研究』第41号　2026年

黒澤　ひかり（くろさわ　ひかり）

奈良県立橿原考古学研究所　調査部調査課　主任技師　1996年、千葉県生まれ

【主な論著】

「飛鳥宮跡における造営方位が斜行する遺構 ―飛鳥宮跡Ⅰ期遺構の理解に向けて―」『考古學論攷』第49冊（共著） 2026年

岩永　玲（いわなが　れい）

奈良文化財研究所　都城発掘調査部　研究員　1991年、奈良県生まれ

【主な論著】

「藤原宮大極殿院北部の造営過程に関する一検討」『文化財論叢Ⅴ』奈良文化財研究所学報第102冊　2023年

『石神遺跡発掘調査報告Ⅰ―石造物出土地の調査―』（分担執筆）奈良文化財研究所学報第106冊　2025年

本中　眞（もとなか　まこと）

奈良文化財研究所　所長　1954年、大阪府生まれ

【主な経歴】

造園学が専門。1977年に奈良国立文化財研究所に採用され、長らく平城宮跡や飛鳥・藤原宮跡の発掘調査に従事した。1994年に文化庁記念物課文化財調査官、1999年に同主任文化財調査官となり、2015 ～ 2018年には内閣官房内閣参事官として、日本の世界遺産推薦・保全の事業に携わった。2021年に奈良文化財研究所長に就任。

【主な論著】

『日本古代の庭園と景観』1995年、『借景』（日本の美術372号）1997年、『世界文化遺産の思想』（共著）2017年など

青柳　正規（あおやぎ　まさのり）

奈良県立橿原考古学研究所　所長　1944年、大連市生まれ

【主な経歴】

西洋美術史、ギリシア・ローマ考古学が専門。世界の文化遺産の保護と活用にも造詣が深い。1972年東京大学文学部助手、1979年筑波大学専任講師。1985年～東京大学文学部助教授、教授、文学部長、副学長を歴任。2005年退官、名誉教授。同年国立西洋美術館館長、2013年文化庁長官、2019年奈良県立橿原考古学研究所長。

【主な論著】

『古代都市ローマ』1990年、『ポンペイ壁画』（共編著）1991年、『人類文明の黎明と暮れ方』2009年など

発掘からみる飛鳥の寺院と古墳

奈良文化財研究所　主任研究員　若杉 智宏

1．はじめに

2026 年 7 月 26 日、韓国・釜山で開催された第 48 回世界遺産委員会において、「飛鳥･藤原の宮都」の世界文化遺産登録が決定した。日本で 27 件目の世界遺産の誕生である。本稿では、「飛鳥・藤原の宮都」の概要を述べ、その構成資産 19 件のうち、奈良文化財研究所（以下、奈文研と略記）が発掘調査を手がけた寺院と古墳 6 件を取り上げ、発掘調査が明らかにした遺跡の実態やその価値について紹介したい。

2．世界文化遺産「飛鳥・藤原の宮都」

世界文化遺産「飛鳥・藤原の宮都」は、6 世紀末から 8 世紀初めにかけて、我が国ではじめて中央集権国家が誕生・成立した過程を示すことができる唯一無二の文化遺産である。これらは、中国大陸および朝鮮半島との政治的・文化的交流を通じてもたらされた知識や技術と、日本独自の伝統の融合によって生みだされ、また、のちの時代の都城の形成や発展に大きな影響を与えた。

表 1　「飛鳥・藤原の宮都」の構成資産一覧

	構成資産名	所在地	類型
飛鳥の宮都	1　飛鳥宮跡	明日香村	宮殿･官衙跡
	2　飛鳥京跡苑池	明日香村	宮殿･官衙跡
	3　飛鳥水落遺跡	明日香村	宮殿･官衙跡
	4　酒船石遺跡	明日香村	宮殿･官衙跡
	5　飛鳥寺跡	明日香村	仏教寺院跡
	6　橘寺跡	明日香村	仏教寺院跡
	7　山田寺跡	桜井市	仏教寺院跡
	8　川原寺跡	明日香村	仏教寺院跡
	9　檜隈寺跡	明日香村	仏教寺院跡
	10　石舞台古墳	明日香村	墳墓
	11　菖蒲池古墳	橿原市	墳墓
	12　牽牛子塚古墳	明日香村	墳墓
藤原の宮都	13　藤原宮跡	橿原市	宮殿･官衙跡
	14　大官大寺跡	明日香村･橿原市	仏教寺院跡
	15　本薬師寺跡	橿原市	仏教寺院跡
	16　天武・持統天皇陵古墳	明日香村	墳墓
	17　中尾山古墳	明日香村	墳墓
	18　キトラ古墳	明日香村	墳墓
	19　高松塚古墳	明日香村	墳墓

「飛鳥・藤原の宮都」の構成資産は、奈良盆地南部の飛鳥・藤原地域に展開しており、「飛鳥の宮都」と「藤原の宮都」という 2 つの連続する時代の宮殿跡とその関連遺跡群からなる。7 世紀を中心に営まれた計 19 件の構成資産は、「宮殿・官衙跡」、「仏教寺院跡」、「墳墓」の 3 つの類型に区分される。表 1 には構成資産の内訳を示した。その位置については本書 P.29 の地図を参照していただきたい。

3．「飛鳥・藤原の宮都」の価値

世界遺産は、世界や人類にとって「顕著な普遍的価値（OUV・Outstanding Universal Value）」をもつ遺産でなければならない。登録されるためには、世界遺産委員会が示した 10 の評価基準のうち、ひとつ以上を満たさなければならないとされる（この他、完全性・真正性や適切な保護管理体制の条件を満たすことも必要）。「飛鳥・藤原の宮都」は、そのうち、評価基準（ⅱ）:「建築、科学技術、記念碑、都市計画、景観設計の発展に重要な影響を与えた、ある期間にわたる価値観の交流又はある文化圏内での価値観の交流を示すものである。」と、評価基準（ⅲ）:「現存するか消滅しているかにかかわらず、ある文化的伝統又は文明の存在を伝承する物証として無二の存在（少なくとも希有な存在）である。」を満たす遺産と認められた。

評価基準（ⅱ）に関しては、宮殿や寺院の建築・土木技術、都市計画や設計、仏教や風水などの思想、律令などにもとづく統治機構など、さまざまな分野において、東アジア文化圏での重要な交流があったことを各構成資産が示している。「宮殿・官衙跡」では、宮殿の構造や意匠、建築技術が、「仏教寺院跡」では、仏教思想や寺院の建築技術が、「墳墓」では、薄葬や風水の思想や、火葬の葬法、墓室壁画の文化などが、中国大陸および朝鮮半島への遣使や渡来人を通じて我が国へもたらされた。

評価基準（ⅲ）に関しては、各資産の立地や構成、相互関係などが総体として、古代宮都の形成過程を示しており、中央集権国家の誕生および整備段階で

ある「飛鳥の宮都」の時代から、それが完成する「藤原の宮都」の時代への変遷を明瞭に物語る。

「宮殿・官衙跡」では、政治・儀式の中心的舞台である宮殿の周囲に官衙的施設を順次追加していった「飛鳥の宮都」から、大極殿院・朝堂院・内裏と数々の官衙群がひとつの宮殿内に集約された「藤原の宮都」へと整備される。

「仏教寺院跡」では、日本最初の仏教寺院である飛鳥寺の造営を契機として、有力豪族によって私的な仏教寺院が建てられた「飛鳥の宮都」の時代から、国家を鎮護する官営の大寺院が都城内に計画的に配置される「藤原の宮都」の時代へと変遷する。

「墳墓」からは、葬送方法の変化が読み取れる。「飛鳥の宮都」の時代には、前方後円墳という旧来の墓制を改め、有力者の墓として中国に影響を受けた方墳を採用した。また、天皇の墳墓として、八角墳という日本独自の墳形が新たに創出される。「藤原の宮都」の時代には、その八角墳を最上位に位置づけた、天皇の隔絶性を視覚的にも示す墓制が確立した。

以上の２つの評価基準にもとづき、「飛鳥・藤原の宮都」は、国や文化、時代を超える極めて優れた価値を有すると認められたのである。

４．発掘が解き明かす「飛鳥・藤原の宮都」

「飛鳥・藤原の宮都」の構成資産は、古くから遺跡として知られているものもあったが、その実態と本質的な価値は、地道な発掘調査の積み重ねにより明らかになってきた。ここでは、主に奈文研が発掘調査をおこなった「仏教寺院跡」４件と「墳墓」２件について、その成果を紹介したい。

（１）飛鳥時代の幕開け－飛鳥寺

造営の歴史　飛鳥寺は、我が国初の本格的寺院として広く知られている。『日本書紀』や『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』などの文献資料によると、飛鳥寺の造営は、概ね以下のような経過を辿る。崇峻天皇元年（588）に百済から僧と寺工、鑪盤博士、瓦博士、画工といった技術者が派遣され、造営が開始される。推古天皇元年（593）には塔心礎に仏舎利が納められ、立柱儀式が挙行された。推古天皇４年（596）には、塔が完成し、蘇我馬子の子・善徳が寺司となり、僧２名（高句麗僧の慧慈と百済僧の慧聡）が住み始める。造寺事業はその後も続き、『日本書紀』には、推古天皇 14 年（606）、鞍作鳥（止利）の手により、銅の丈六仏と刺繍で作られた丈六仏が完成し、金堂におさめられた、とある（『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』は、大仏完成は推古天皇 17 年（609）とする）。

伽藍配置　飛鳥寺の発掘調査は 1956 年に始まる。奈文研による飛鳥地域での初めての発掘調査であった。調査前、飛鳥寺の伽藍配置については、さまざまな説があったが、発掘調査を進めると、塔の北にある中金堂に加え、塔の東西にも塔の方を向いた金堂が検出され、それらを中門から延びる回廊が取り囲むことが確認された（図１）。塔を中心に３つの金堂を置く、我が国の古代寺院において例をみない特異な伽藍配置であることが明らかとなったのである。

この伽藍配置は、発掘直後から指摘されているように、高句麗の清岩里廃寺に類例があり、高句麗の影響を認める説が一般的である。『日本書紀』の記事を改めて眺めると、推古天皇４年（596）、寺司とともに飛鳥寺に住むこととなった僧のうち、１名は高句麗僧の慧慈であり、また、鞍作鳥による丈六仏造営に際し、高句麗の大興王から黄金 300 両が贈られていることが知られる。このような記事や発掘調査で明らかとなった伽藍配置は、飛鳥寺の造営に高



図１　飛鳥寺の南門および中門の発掘調査（1956 年）



図２　飛鳥寺塔心礎の発掘調査（1957 年）

句麗からも少なからぬ関与があったことを物語る。

出土遺物　1957 年におこなわれた塔跡の発掘調査では､塔心礎から数多くの埋納品が出土した(図２)。その内容は、鉄製の札甲や刀子といった武器･武具、蛇行状鉄器や青銅馬鈴などの馬具、耳環・歩揺・杏葉形打出金具・鈴などの金銅製品、石やガラス、金属や真珠を材料とした各種玉類、砥石、金銀の延板や小粒、雲母片などで、出土したほぼ全ての品が創建当初の埋納物と理解されている。これらの埋納品には、古墳の副葬品と大差がない札甲や刀子、馬具、耳環や玉類が多くみられる一方、金銀の延板や小粒など、古墳からは出土しない仏教色の強い品が含まれ、まさに古墳時代から飛鳥時代への過渡期的様相を示すものとして、大いに注目を集めた。

飛鳥寺から出土した考古遺物においては、従来から瓦の文様や製作技術に百済の影響が指摘されてきた。また、塔心礎埋納品には、百済の王興寺や弥勒寺の舎利荘厳具と共通する品目が多くみられ、百済における舎利埋納儀礼との関連性がうかがえる。

このように、飛鳥寺の遺構や遺物は、東アジア世界における政治的・文化的交流の存在を明確に示す証左である。発掘調査で得られた数々の成果を文献資料とあわせ考えることで、百済や高句麗といった朝鮮半島の国々の協力を得つつ、我が国で初めての本格的な寺院建設を推し進めた、初期の仏教受容の様子が具体的に浮かび上がってくる。

（２）飛鳥を代表する古代寺院－山田寺

造営の歴史　次に紹介するのは、蘇我倉山田石川麻呂が発願した山田寺である。山田寺造営の過程は、『上宮聖徳法王帝説』の料紙裏面に書かれていた文章（裏書）にある記事から知ることができる。それによると、造営の開始は舒明天皇 13 年（641）のことで、その年に寺域内の整地が始められた。皇極天皇２年（643）に金堂の建立に着手し、大化４年（648）には僧が住み始める。しかし、大化５年(649)、願主である石川麻呂が、中大兄皇子に謀反の疑いをかけられ自害する。この事件のために山田寺の造営は中断するが、天智天皇２年（663）に再開され、塔の建造が始まる。塔の完成には時間を要したようで、天武天皇５年（676）にようやく完成する。天武天皇７年（678）には丈六仏を鋳造し、同 14 年（685)、大仏開眼に至る。この年には天武天皇が山田寺へ行幸しており、この頃に寺院はおおよそ完成したとみられる。発願から完成までは、40 年以上の歳月を要した。

発掘調査　山田寺の跡地には、古くから礎石や基壇が残っており、明治以来、多くの研究者による記事がある。発掘調査は 1976 年から奈文研によっておこなわれ、20 年におよぶ継続的な調査が実施された。山田寺の伽藍は、南から南門・中門・塔・金堂・講堂が一直線に並ぶ。このような主要堂塔が一列に並ぶ一塔一金堂式の伽藍配置は、百済の寺院に多くみられるものである。

倒壊した回廊　山田寺の調査成果で特筆すべきは、なんといっても東面回廊の発見であろう（図３)。土砂崩れで倒壊した回廊が、ほぼそのままのすがたでみつかったのである。埋もれていた回廊の建築部材は、非常に良好な状態で残っており、「法隆寺より古い木造建築遺構」として報道でも大きく取り上げられた。この発見により、山田寺の回廊の構造が細部まで明らかとなり、現存する７世紀の建物である法隆寺金堂や五重塔などとも詳細な比較が可能となった。また、法隆寺西院伽藍より古い建築遺構として、飛鳥時代の建築様式を伝える数少ない７世紀の実物資料でもある。

造営技術　発掘調査では、金堂や塔をはじめとする各堂宇の柱配置や造営のようすも明らかとなった。金堂や塔では、建立に先立ち版築による念入りな掘込地業がなされており、文献資料から知られる「金堂→塔」という造営順序を、遺構の重複関係からも確認することができた。このほか、金堂西面階段の羽目石には獅子のレリーフが施され、回廊の礎石の円柱座には蓮華文が彫られていた。また、燈籠は、石を刳り抜き、屋根や連子窓などを削り出しているとみられ、各所で高度な石材加工技術をうかがうことができる。



図３　山田寺東面回廊の発掘調査（1984 年）

出土遺物　山田寺の調査では、仏像や建築金具、金属製の荘厳具、瓦、土器、木製品、木簡など、多種多様な遺物が出土している。このうち、銅板五尊像は幅4.5㎝、高さ3.7㎝の小さな銅板に仏像を半肉彫りした優品で、初唐代の舶来品とみられる。塔周辺からは、塼仏が多く出土しており、これらの塼仏にも中国の影響がうかがえる。もっとも多く出土した十二尊連坐塼仏には、黒漆の上に金箔を施したものがあり、本来は金色に輝く小さな仏像が塔の壁面を飾っていたようである。また、金堂からは壁画が残る壁土片が出土していることから、金堂内部には壁画が描かれていたと推察できる。

以上のような山田寺の数々の発掘調査成果は、在りし日の堂塔のようすを鮮やかに伝える。飛鳥の古代寺院において、発掘調査により主要堂塔のようすが山田寺ほど詳しくわかっている例は他にない。山田寺は、中国や朝鮮半島との交流を通じて発展した飛鳥時代の仏教文化を理解する上で、なくてはならない寺院といえる。

（3）藤原京内の国家寺院－本薬師寺と大官大寺

続いて、藤原京の時代に造られた２つの国家寺院を紹介しよう。

本薬師寺の歴史　１つ目は本薬師寺。天武天皇９年（680）に、天皇が皇后（のちの持統天皇）の病気平癒を願い発願した寺院である。朱鳥元年（686）に天武天皇が崩御すると、造営は妻の持統天皇に引き継がれる。『日本書紀』には、持統天皇２年（688）に、薬師寺で無遮大会がおこなわれた記事がみえ、藤原京の四大寺のひとつに数えられている。その後、『続日本紀』には、文武天皇２年（698）に、寺の造営がほぼ完了し、衆僧を寺に住わせるとの記事があり、この頃には寺はほぼ完成していたとされる。

伽藍配置　本薬師寺の伽藍配置は、金堂の前面に東西２つの塔を配置した双塔式と呼ばれるものである（図４）。その淵源は中国に求められ、７世紀後半に統一新羅で盛行した。本薬師寺は、双塔伽藍を採用した日本で初めての寺院とされ、その伽藍配置は平城京の薬師寺でも踏襲される。双塔伽藍については、中国から直接情報がもたらされた可能性も否定できないが、新羅における双塔伽藍寺院の成立年代を踏まえると、朝鮮半島の最新様式がいち早く日本にもたらされ、藤原京の本薬師寺に取り入れられた可能性が高いと考える。

条坊との関係　本薬師寺と藤原京条坊との関係をみると、本薬師寺の寺域は右京八条三坊（条坊道路の呼称は岸俊男説による（岸1969））の四町分を占めている。発掘調査では、本薬師寺の中門や参道の下層で、藤原京の条坊道路がみつかり、本薬師寺の造営より前に藤原京の条坊施工がなされていたと確定した。伽藍中軸線は、西三坊坊間路とぴったり一致しており、藤原京の条坊区画にあわせ計画的に配置されていたことが明らかとなった。まさに、「藤原の宮都」の仏教寺院に相応しい特徴である。

大官大寺の歴史　２つ目は大官大寺である。大官大寺の歴史は、『日本書紀』や『続日本紀』、『大安寺伽藍縁起幷流記資財帳』などの文献資料から知ることができる。大官大寺は、舒明天皇が発願した百済大寺に起源をもつ国家寺院で、その名の通り「官寺（国立の寺院）の中でも特に寺格の高い大寺」である。舒明天皇11年（639）に創建された百済大寺は、天武天皇の時代に高市の地に移る。その寺は高市大寺と呼ばれるが、天武天皇６年（677）には大官大寺と寺名を改める。天武朝の後半には、『日本書紀』に大官大寺での出家や誦経などの記事が度々登場し、天武天皇治世の末年ごろには国家の大寺として、主要堂塔が整っていたと考えられている。さらに、『続日本紀』や『大安寺伽藍縁起幷流記資財帳』には、文武天皇の時代にも九重塔や金堂を造営した記事があり、文武朝にも寺の工事がおこなわれたと伝わる。現在、香久山南方に位置する大官大寺は、発掘調査の結果、文武朝に造営されたものと考えられ、天武朝の大官大寺（高市大寺）はまだみつかっていない。

大官大寺の発掘調査　発掘調査は1974年から10年間おこなわれ、主要伽藍の構造と寺域の範囲がお



図４　双塔式の伽藍配置をもつ本薬師寺跡（1989年）

おむね明らかになった。金堂は藤原宮大極殿に匹敵する大きさで、当時の日本で最大級の建物であった。塔も非常に壮大で（図５）、初重は一辺約 15 mの大きさで、法隆寺や山田寺の五重塔の２倍以上もあった。文献資料にみえる九重塔に相応しい規模である。

罹災痕跡　これらに加えて、発掘調査における重要な成果は、金堂や塔、講堂や中門、回廊といった主要伽藍全体が火災により焼失していたという事実である。しかも、発掘調査の示す焼失時の各堂宇の建設状況は、金堂や講堂は完成していたが、塔や中門、回廊は建設途中で被災していたというものだった。このような各堂塔の検出状況や使用された瓦の異同から、寺の造営は、金堂→講堂→塔→中門・回廊の順になされたことが明らかとなった。また、金堂の基壇土中からは、天武朝までは遡らないと考えられる土器片が出土しており、上述のように、これらの建物は文武朝に造営されたと理解されている。

寺　域　大官大寺の寺域は、北を九条条間路、南を十条大路、東を東四坊大路、西を東三坊大路に囲まれた南北３町（約 390m）、東西２町（約 260m）、計６町の範囲を占める（ただし、寺の東に東四坊大路は通っていない可能性が高い）。当時の飛鳥・藤原地域において最大の規模を誇り、本薬師寺と同様、藤原京の条坊区画内におさまるよう計画的に配置されたと考えられている。

文武朝は大宝律令が定まり（701 年）、律令国家が完成した時代である。壮大な伽藍と天にそびえ立つ九重塔のすがたは、完成には至らなかったものの、鎮護国家を目的とした「藤原の宮都」の国家寺院を象徴する存在であったといえる。

（４）飛鳥の壁画古墳－高松塚古墳・キトラ古墳

２つの壁画古墳　最後に２件の墳墓を紹介したい。高松塚古墳は 1972 年３月、日本で初めて発見された壁画古墳として著名であり、飛鳥美人をはじめとする極彩色の壁画は、日本中に考古学・飛鳥ブームを巻き起こした。その 11 年後の 1983 年、ファイバースコープ調査により、キトラ古墳でも玄武の壁画が確認された。我が国で２例目の壁画古墳の発見である。

両古墳とも、藤原京南郊の丘陵地帯に設けられた当時の王陵区内に位置している。小さな二段築成の円墳で、小型化した石室や限定された副葬品の内容は薄葬化の進行を明確に示している。このような立地や古墳の内容は、「藤原の宮都」の墳墓の特徴である。出土した土器からも、築造時期は藤原京の時代、７世紀末から８世紀初頭と考えられている。被葬者については、天武天皇の皇子や、有力官人、渡来系氏族など、さまざまな説が出されているが、確定はできない。私は、立地や墳丘・石室の大きさからみて、高松塚古墳の被葬者は、キトラ古墳よりワンランク上の人物であっただろうと考えている。

高松塚古墳の発掘調査　高松塚古墳では、壁画発見の翌月にあたる 1972 年４月以降、文化庁が古墳および壁画の管理をおこなってきた。しかし、2001 年におきた石室内でのカビの大発生により、壁画の劣化が深刻な問題となった。壁画の修理のため、2006 年に石室解体に向けた発掘調査が始まり（図６）、2007 年、全ての壁画は石室石材とともに古墳の外へと運び出された。壁画を守るため、石室は解体を余儀なくされたが、この発掘調査を通じて、古墳の築造過程の詳細が明らかになったことは大きな成果であった。墳丘造成には、土を固く突き固める版築工法が用いられ、石室には、緻密な設計にもとづき、梃子穴や相欠、水準杭といった各種の技術



図５　大官大寺九重塔の発掘調査（1978 年）



図６　高松塚古墳の墳丘の発掘調査（2006 年）

が駆使されていた。これらは、朝鮮半島から伝わり、宮殿や寺院の造営を通じて培われた当時の最高水準の構築技術であった。

キトラ古墳の発掘調査　一方、キトラ古墳では、漆喰の崩落により壁画が失われる危険を回避するため、6年4ヵ月の歳月をかけて壁画が取り外された。壁画取り外し前の発掘調査（2002～2004年）、および取り外し後の考古学的調査（2011～2013年）は、キトラ古墳にも高松塚古墳と同様の高い構築技術が用いられていたことを明らかにした。

壁画の内容　両古墳の壁画の内容は、四神と星宿（星座）、日月像を基本とし、高松塚古墳ではそれらに男女群像が、キトラ古墳では獣頭人身の十二支像が加わる（図7）。四神や日月星宿、人物像といった題材は中国の壁画墓に通有のもので、ぼかしによる立体表現や、絵の具を塗り重ねる彩色法などの絵画技法も唐の壁画と共通するものであった。さらに、石室内の整然とした図像の構成を踏まえると、両古墳の壁画は、モチーフだけでなく、その根底にある陰陽五行思想や葬送観をも含めて、中国の墓室壁画の文化を総体的に受容して描かれたと理解される。

石室に描かれた壁画、そして近年の発掘調査によって明らかとなった古墳の構築技術の内容は、日本の2基の壁画古墳が、中国大陸や朝鮮半島からの直接的な影響をもとに造られたことを明瞭に示している。高松塚古墳とキトラ古墳は、まさに東アジア世界における文化的・技術的交流の産物といえよう。



図7　キトラ古墳の石室内部（2004年）

5．おわりに

この小文では、奈文研がおこなった発掘調査成果のうち、主なものを取り上げ紹介してきたが、そのすべてを網羅できたわけではない。しかし、いずれの遺跡も、当時の東アジア諸国との密接な関係の中で造られたものであったことは、お伝えできたかと思う。飛鳥・藤原地域には、今回世界遺産に登録された構成資産をはじめ、数々の遺跡が密集し、それらが一体となって7世紀の政治・文化の中心地として機能していた。どの遺跡も、7世紀史を理解する上では欠かせないものばかりである。飛鳥・藤原における発掘調査は今後も続き、埋もれた古代のすがたが解き明かされるはずである。まだ見ぬ新たな発見にご期待いただきたい。

【主要参考文献】（各発掘調査報告書・概報は割愛）

飛鳥資料館 2013『飛鳥寺 2013』飛鳥資料館図録第 58 冊

上原真人 2015「双塔伽藍の伝来と展開」『瓦・木器・寺院－ここまでの研究・これからの考古学－』すいれん舎

元興寺・元興寺文化財研究所 2020『日本仏教はじまりの寺　元興寺』吉川弘文館

岸俊男 1969「京域の想定と藤原京条坊制」『藤原宮－国道 165 号バイパスに伴う宮域調査－』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 25 冊、奈良県教育委員会

木下正史 2005『飛鳥幻の寺、大官大寺の謎』角川選書 369、角川書店

奈良文化財研究所 2005『奈良文化財研究所五十年史　本文編』

箱崎和久 2012『奇偉荘厳の白鳳寺院・山田寺』シリーズ「遺跡を学ぶ」085、新泉社

花谷浩 1997「本薬師寺の発掘調査」『佛教藝術』235 号、毎日新聞社

廣瀬覚・建石徹 2022『極彩色壁画の発見　高松塚古墳・キトラ古墳』シリーズ「遺跡を学ぶ」155、新泉社

森郁夫 2006「古代寺院における伽藍配置と仏教観」『考古学ジャーナル』No.545、ニュー・サイエンス社

【図版出典】

図1～7　奈文研撮影

表1　文化庁報道資料より筆者作成

橿考研による飛鳥発掘の軌跡

奈良県立橿原考古学研究所　指導研究員　鈴木 一議

1．はじめに

奈良県立橿原考古学研究所（以下､橿考研と略記）では、1960 年以来、65 年以上にわたって明日香村岡を中心に所在する宮殿とその関連遺跡を「飛鳥京跡」として発掘調査を行ってきた。それにより、飛鳥時代の宮殿遺跡である飛鳥宮跡を中心に、様々な遺跡の内容を明らかにしてきた。

そのなかで、今回は、飛鳥宮跡とそれに付属する苑池（庭園）遺跡である飛鳥京跡苑池を取り上げ、その概要を整理する。そして、橿考研による飛鳥[(1)]の発掘調査について、その軌跡を概観したい。

2．宮殿と苑池

（1）飛鳥宮跡

飛鳥宮跡では、大きく３時期の宮殿遺構が、同所に重複して存在することが判明している。最下層のⅠ期遺構が舒明天皇の飛鳥岡本宮（630 年から）、Ⅱ期遺構が皇極天皇の飛鳥板蓋宮（643 年から）、Ⅲ期遺構のうち、前半のⅢ―Ａ期遺構が斉明天皇・天智天皇の後飛鳥岡本宮（656 年から）、後半のⅢ―Ｂ期遺構が天武天皇・持統天皇の飛鳥浄御原宮（672 年から）に比定されている（林部 2001、小澤 2003、林部編 2008）。宮殿遺構は、主に掘立柱建物や掘立柱塀、石組溝、石敷で構成されている。最上層の宮殿遺構であるⅢ期遺構が最も良好に遺存しており、その具体的な構造が判明している。

Ⅰ期遺構（図１左上）　Ⅰ期遺構の特徴は、遺構の造営方位が地形の傾斜にあわせ真北から西に 20 度程度傾いていること､塀や建物の柱抜取穴の埋土に、焼土や炭化物が顕著に含まれることである。『日本書紀』には、飛鳥岡本宮が舒明８年（636）６月に火災に遭ったとある。柱抜取穴の埋土にみられる特徴は、大規模な火災があったことを示唆し、Ⅰ期遺構が飛鳥岡本宮である蓋然性が高いことを示す。

Ⅱ期遺構（図１右上）　Ⅱ期遺構の特徴は、遺構の造営方位がⅠ期遺構とは異なり、正方位であることである。造営方位の転換は大きな画期であり、これ以後の宮殿は正方位を指向して造営される。

Ⅲ―Ａ期遺構（図１左下）　塀に囲まれた宮殿の中心区画である内郭とそれを取り囲む外郭からなる。内郭は、東西 155 ｍ前後、南北 197 ｍ程と南北に長く、南辺の中央に南門が開く。内部は地面の舗装の違いから、北区画と南区画に分けることができる。砂利敷の南区画は儀式などを行う公的な空間、石敷の北区画は天皇の居所である私的な空間と考えられる（今尾 2008、林部編 2008）。南区画の中央には内郭前殿（SB7910）が位置し、全体に整然と建物が配置されている。北区画の中央南寄りには同規模の南の正殿（SB0301）と北の正殿（SB0501）が南北に並び、その北には長廊状建物（SB6205）、北東隅には石敷を伴う井戸（SE6001）がある。

Ⅲ―Ｂ期遺構（図１右下）　Ⅲ―Ａ期の内郭と外郭を継承し、内郭の南東にエビノコ郭が付加された段階である。内郭では、南の正殿（SB0301）の西に付属していた建物が解体され、池状遺構（SX0303）が設けられる。エビノコ郭は、東西 94 ｍ、南北 55 ｍ程と東西に長く、西辺の中央に西門が開く。内部の地面の舗装は､建物周囲を除き砂利敷である。区画の中央には飛鳥宮跡で最大級の建物（SB7701）が位置する。この建物を『日本書紀』の天武紀にみえる「大極殿」にあてる説がある（林部 2001、小澤 2003）。最近では、内郭の北西でも大型の建物（SB0934）の存在が明らかとなっている（鶴見編 2014）。

今後の課題　ここまでのとおり、重複する宮殿遺構のうち、Ⅲ期遺構内郭の内容が明確となっている。外郭は、出土遺物から宮殿を支える官衙群が存在したと考えられるが（東影編 2011、鶴見編 2019）、発掘調査が進んでおらず、その内容は不明である。その範囲も、東辺の掘立柱塀（SA7405）が検出されているのみで、未確定である。下層の宮殿遺構であるⅠ・Ⅱ期遺構の内容も、発掘調査が部分的なこともあり、不明な点が多い。このように、依然として解明すべき多くの課題が残されている。



図１　飛鳥宮跡の宮殿遺構の配置（S=1 ／ 3,500）

（２）飛鳥京跡苑池

飛鳥京跡苑池は、飛鳥宮跡Ⅲ期遺構内郭の北西に位置し、南北に並ぶ意匠の異なるふたつの池と水路などで構成される（図２）。その範囲は、南北 280 m程、東西 100 m程である（卜部編 2012）。

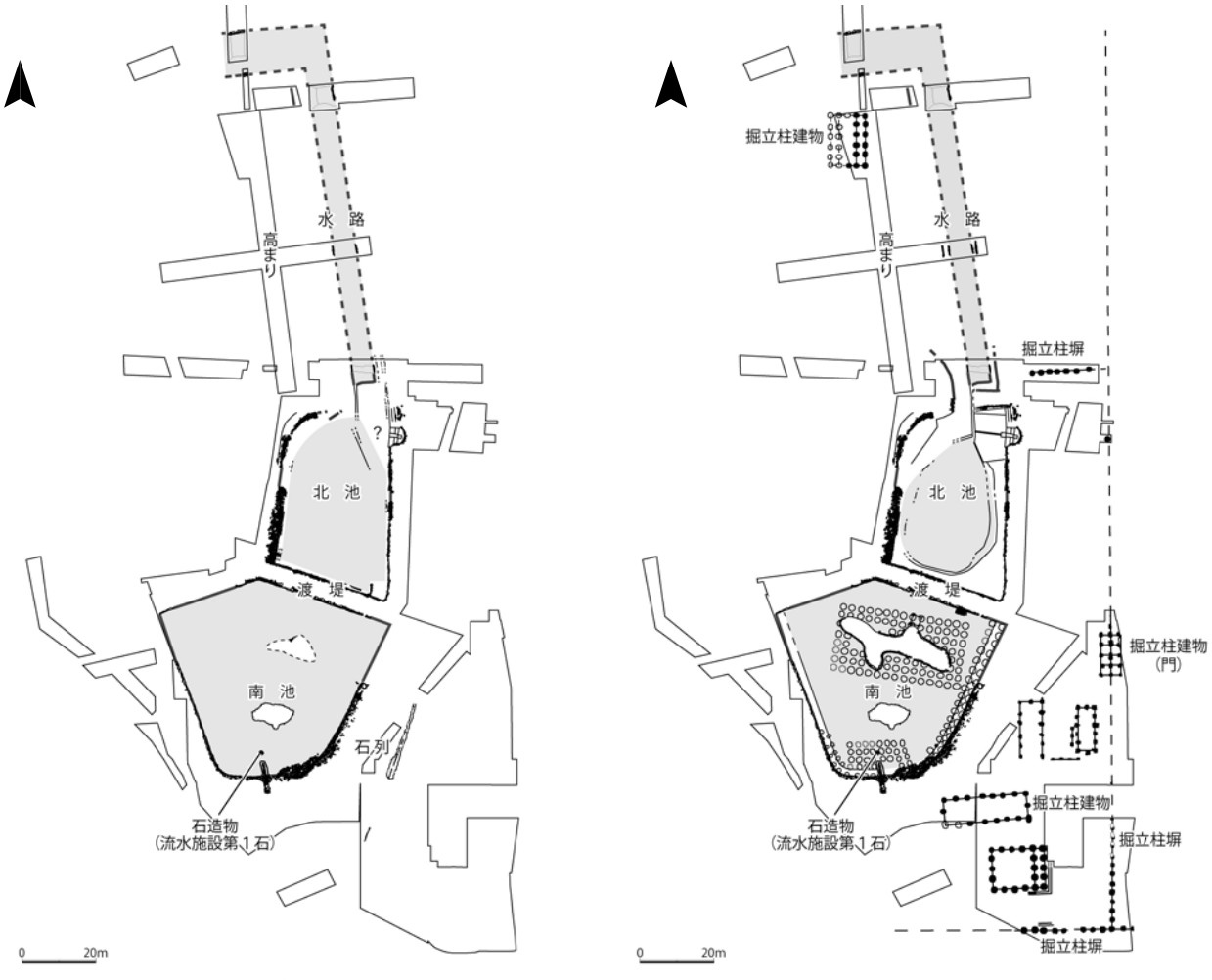
南　池　南池は、平面が五角形状で、東西が最大で 63 m程、南北が最大で 53 m程である。護岸には自然石をほぼ垂直に積み上げており、南東部での高さは３mを超える。池底は石敷きで、池内には中島や島状の石積み､流水施設を構成する石造物がある。この石造物は、1916 年に調査地点で掘り出されたふたつの石造物と組み合うことも判明した。水深は 30cm 程と非常に浅い。

北　池　北池は、平面形が南北に長い方形で、東西が最大で 36 m程、南北が最大で 52 m程である。護岸は、自然石をほぼ垂直に積み上げた部分、階段状に積み上げた部分がある。池底とそれに向かう斜面に自然石を乱雑に敷く。池の北東隅には湧水部に石組や石敷を施した流水施設がある。水深は２m以上で、中央部が深い。

水　路　北池の北に位置し、幅６m程、全長 120 m以上である。南北方向に 90 m程のびたのち、飛鳥川方向へ折れる。池の水は、水路を経て飛鳥川へ排水されたとみられる。

飛鳥京跡苑池の変遷　飛鳥京跡苑池は、飛鳥時代の中頃に築造（図２左)、後半に大規模な改修が加えられ、全体に施設が充実する（図２右)。そして、宮が藤原宮へ遷った後も維持・管理されていたとみられる。

今後の課題　南池と北池の内容はかなり明らかとなった。しかし、水路は、部分的な調査にとどまっており、その周囲も含めて不明な点が多い。水路からは、多くの木簡が出土しており（鶴見編 2019)、苑池の具体的な機能や隣接する外郭との関係を明らかにする上でも、その解明は大きな課題といえる。



築造当初（飛鳥時代中頃）　　大規模改修後（飛鳥時代後半）

図２　飛鳥京跡苑池の遺構配置（S=1 ／ 2,000）

3．橿考研による飛鳥の発掘

発掘調査の契機　1951 年､農林省（現:農林水産省）により、農業用水として吉野川（紀の川）の水を奈良盆地へ供給する導水路（吉野川分水）工事が計画された。これを受け、当時の橿考研では、1954 年に予定地を踏査し、東側の幹線水路が明日香村岡のほぼ中央を横断することを知る（末永編 1971）。1959 年には、当時の奈良国立文化財研究所（以下、奈文研と略記）を主体とし、奈良県との共同調査という形で、導水路予定地の予備調査が実施された。予備調査の結果、石敷や石組溝のほか、掘立柱塀、掘立柱建物が検出された（奈文研 1961）。

発掘調査の開始（1 から 19 次）（図 3・4）　奈文研が平城宮跡の調査を進めることとなり、予備調査の翌年、1960 年から、遺構の内容確認を目的とした発掘調査を橿考研が担うことになった。発掘調査は、予備調査の南遺構周辺からはじまり、その南側で、建物やのちに井戸（SE6001）と判明する石敷が検出された（1 次）。続いて、南北方向の塀が検出され、宮殿遺構が南に展開することが判明し（2 次）、内郭の北東隅が検出された（4 次）。内郭の北東から北へのびる石組溝からは、飛鳥宮跡ではじめての木簡が出土した（10 次）。1960 年代は、保存目的調査[(2)]が主で、内郭北東部の宮殿遺構の状況が明らかとなった。

緊急調査の増加（20 から 73 次）　1970 年代に入ると同時に、開発に伴う発掘調査（緊急調査）件数が増加する。保存目的調査は、内郭北西部を中心に展開する。1970 年代は、Ⅰ期遺構（29 次）や宮殿造営より前の古墳時代の遺構（34 次）、エビノコ郭西門（45 次）、外郭東辺の塀（47 次）、エビノコ郭正殿（61 次）、内郭前殿（73 次）の検出、Ⅲ期遺構の造営時期を示す木簡の出土（51 次）と飛鳥宮跡に関する重要な成果が相次いだ。

広がる調査範囲（74 から 119 次）　1980 年代に入ると保存目的調査は一挙に減少し、緊急調査がより顕著となる。それに伴い、調査対象範囲も広がりを見せる。そのなかで、内郭南門の検出により内郭の南北規模が確定（78 次）､エビノコ郭南辺の塀（116 次）の検出といった成果もあった。しかし、これらの調査原因は、いずれも開発に伴うもので、遺構保存の調整がはかられた。

発掘調査の停滞（120 から 140 次）　1990 年代は、

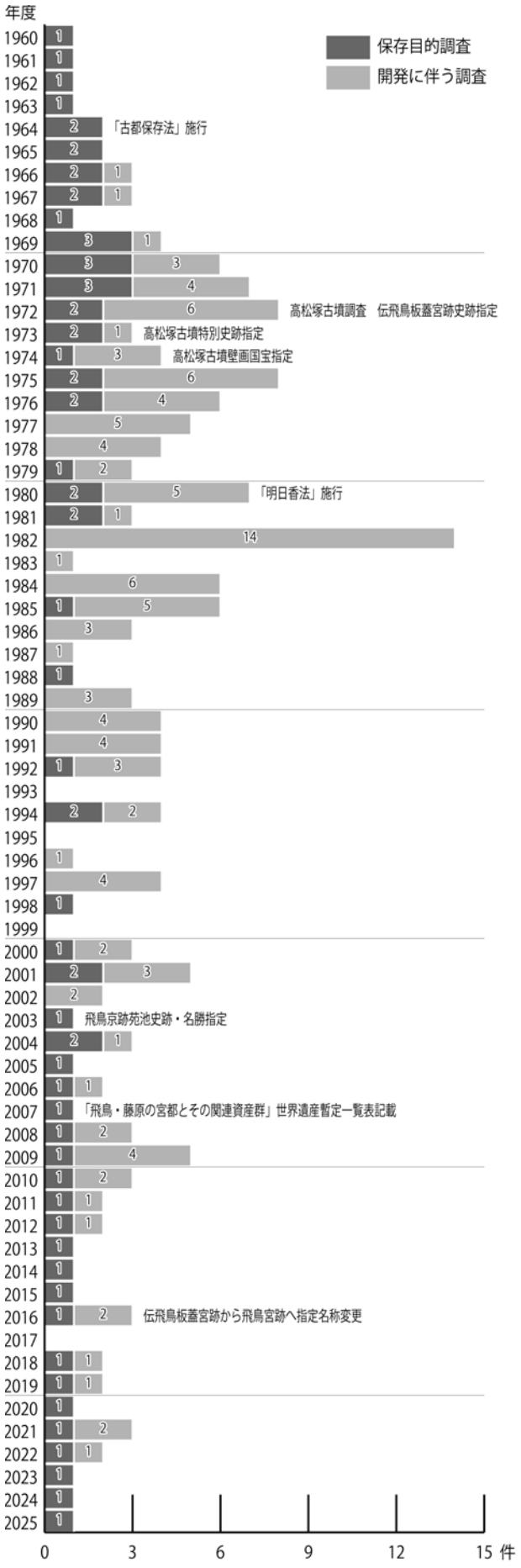


図 3　各年度の調査原因別調査件数と主な出来事

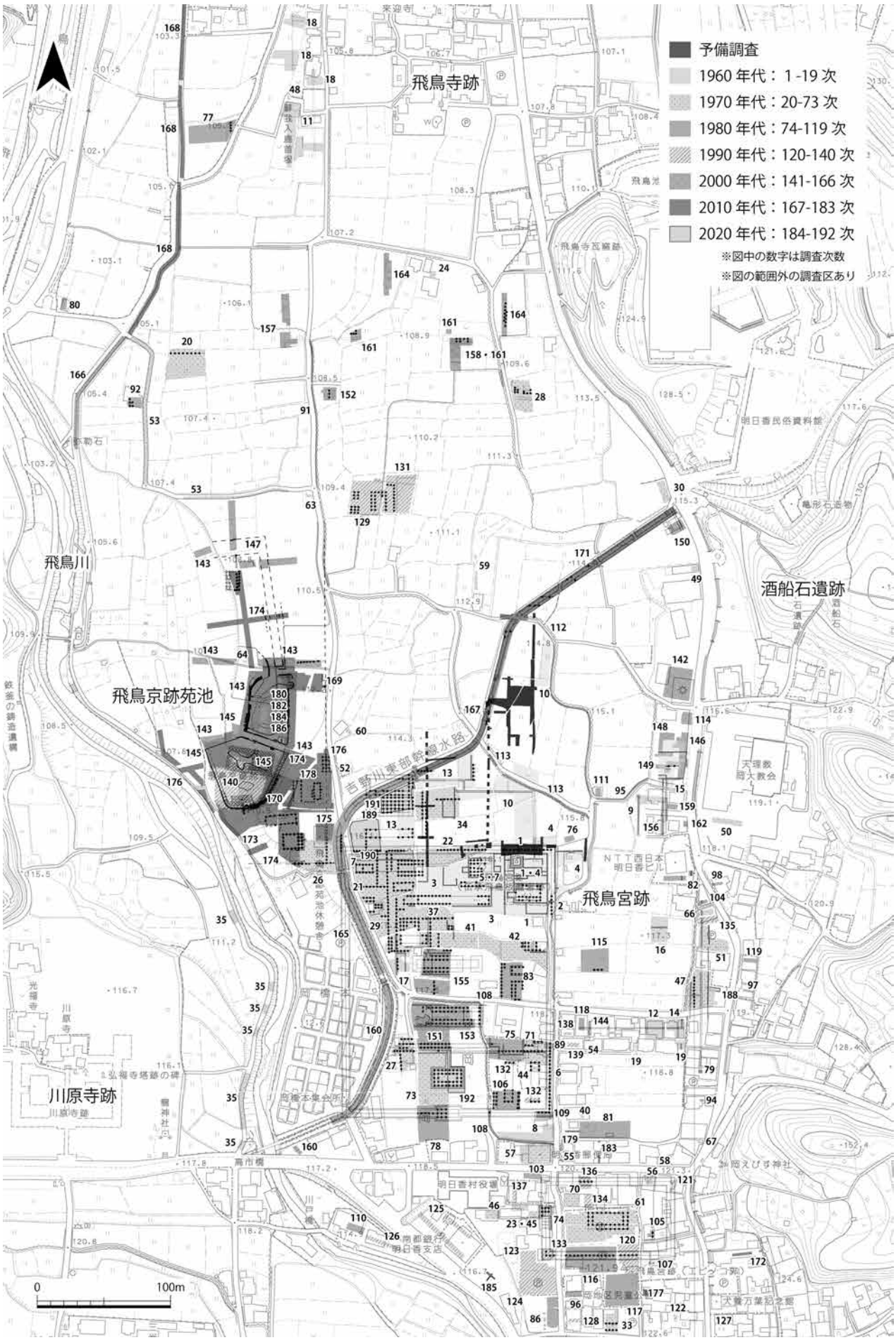


図４　年代別調査区配置図（S=1 ／ 4,000）

1970・1980 年代に比べると調査件数が一挙に減少する。その調査原因は開発に伴うものが主で、保存目的調査は 1980 年代と同様に低調である。そのなかで、保存目的調査により、不明な点の多かった外郭において建物群が検出され（129・131 次）、さらに飛鳥京跡苑池の存在が明らかとなった（140 次）。

発掘調査の進展（141 から 166 次） 2000 年代に入ると、飛鳥京跡苑池の調査（143・145・147 次）に続き、「飛鳥正宮の学術調査事業」として内郭中央部の調査（151・152・153・155 次）と飛鳥宮跡北辺の調査（157・158 次）、「世界遺産登録推進（飛鳥宮跡学術調査）事業」として飛鳥宮跡北辺の調査（161・164 次）と保存目的調査が実施された。後半には発掘調査の契機となった吉野川分水の改修事業に伴う発掘調査（160・165・166 次）もはじまった。これにより、飛鳥宮跡と飛鳥京跡苑池の内容が明らかにされるとともに、内郭の北西に隣接して大型の建物跡が存在するという新たな事実も判明した（165 次）。このように、毎年のように大きな成果が得られ、飛鳥における発掘調査が大きく進展することとなった。

飛鳥京跡苑池の発掘調査（167 から 183 次） 2010 年度からは「史跡・名勝飛鳥京跡苑池保存整備活用事業」、続く「飛鳥宮跡・飛鳥京跡苑池整備活用事業」による飛鳥京跡苑池の保存目的調査が継続して実施された。これにより、南池の全容（170・173・174 次）、苑池周辺の状況（169・175・176・178 次）、北池の規模と内容（180・182 次）が判明し、飛鳥京跡苑池の内容がさらに鮮明となった。

発掘調査の新たな展開（184 から 192 次） 2022 年度からは内郭の北西に隣接する大型建物と内郭の関係把握を目的に、発掘調査が開始された（189・190・191 次）。大型建物 SB0934 の規模が確定し、建物群の存在が判明するなどの成果が得られており、飛鳥宮跡の発掘調査が、新たな展開を迎えている。

４．おわりに

橿考研では、飛鳥において 65 年以上、190 次を越える発掘調査を積み重ねてきたが、まだまだ多くの課題が残されている。発掘調査によって新たに明らかとなる事実も多いが、それと同時に課題も生まれる。これらの課題の解決が、飛鳥宮跡や飛鳥京跡苑池をはじめとする飛鳥の遺跡の具体像を明らかにし、遺跡としての価値を更新することになる。そして、飛鳥時代史をより鮮明にすることにつながるといえる。

発掘調査は、多くの方々の関心が支えとなっていることは言うまでもない。今後も続く地道な調査、そして研究の進展をぜひ見守っていただきたい。

【註】

（１）本稿における飛鳥は、明日香村の北部にあたる大字岡と大字飛鳥を中心とした地域を指すこととしたい。

（２）開発行為に伴う発掘調査ではなく、遺跡の内容や範囲を把握するために行う発掘調査（文化庁文化財部記念物課編 2010）。

【主要参考文献】

今尾文昭 2008『律令期陵墓の成立と都城』古代日本の陵墓と古墳２、青木書店

卜部行弘編 2012『史跡・名勝 飛鳥京跡苑池（一）―飛鳥京跡Ⅴ―』奈良県立橿原考古学研究所

小澤毅 2003『日本古代宮都構造の研究』青木書店

末永雅雄編 1971『飛鳥京跡一』奈良県教育委員会

鶴見泰寿編 2014『飛鳥京跡VI』奈良県立橿原考古学研究所

鶴見泰寿編 2019『飛鳥宮跡出土木簡』奈良県立橿原考古学研究所

奈良国立文化財研究所 1961『平城宮跡第一次・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告』奈良国立文化財研究所

林部均 2001『古代宮都形成過程の研究』青木書店

林部均編 2008『飛鳥京跡Ⅲ』奈良県立橿原考古学研究所

東影悠編 2011『飛鳥京跡Ⅳ』奈良県立橿原考古学研究所

文化庁文化財部記念物課編 2010『発掘調査のてびき―集落遺跡発掘編―』文化庁文化財部記念物課

【図版出典】

図１・２・３　筆者作成

図４　明日香村地形図（2017）をもとに筆者作成

飛鳥宮跡における発掘調査の最前線

奈良県立橿原考古学研究所　主任技師　黒澤 ひかり

1．はじめに

飛鳥宮跡では、現在に至るまで幾度にもわたる発掘調査がおこなわれてきた。これまでに蓄積された調査成果は、飛鳥宮跡の実像を徐々に明らかにする一方､新たな課題や疑問も提示している。近年では、初期の調査成果を新たな視点から再検討するとともに、未調査地点での発掘調査も進められ、飛鳥宮跡の研究は新たな展開を迎えている。本稿では、近年の発掘調査で得られた成果を中心に、調査と研究の最前線を紹介する。

2．近年の調査と契機―165 次の成果―

現在、学術的成果の蓄積を図るとともに、将来的な史跡整備・活用を見据え、飛鳥宮跡の発掘調査を進めている。調査は、Ⅲ期遺構の区画施設に囲まれた内郭の北西にあたる部分と、内郭外側に広く展開する外郭のうち、内郭北側にあたる地区を中心としている（図１）。

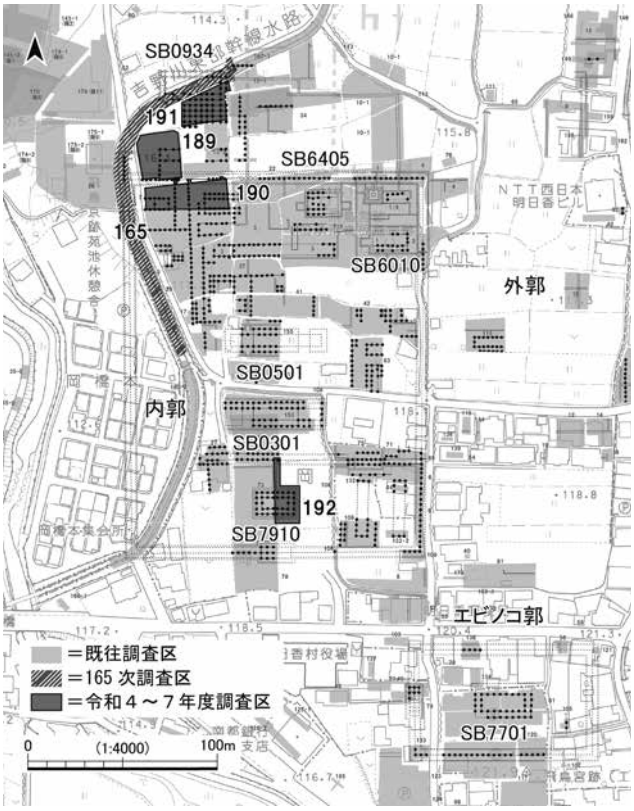


図１　飛鳥宮跡の調査区配置図（S=1 ／ 4,000）

165 次調査　近年の調査契機となったのが、吉野川分水の改修事業に伴い平成 21 年（2009）に実施した飛鳥京跡第 165 次調査[(1)]である（鶴見編 2014）。

大型掘立柱建物 SB0934　一辺約 1.7 m、深さ約 1.7 mを測る大型柱穴 11 基を検出した。柱穴の規模と規則的な配置から、桁行 11 間（約 35.4 m）、梁行５間（約 15 m）の東西棟の四面廂建物となる可能性が指摘された。この復元案では、飛鳥宮跡でそれまで最大であったエビノコ郭の SB7701（桁行９間、梁行５間）（菅谷ほか 1978）や、内郭の主要建物の規模をいずれも上回る（表１）。周辺で検出されている遺構との関係から、Ⅲ−B 期遺構（飛鳥浄御原宮）に属する建物と判断された。

石組溝 SD6701　13 次調査で検出されていた石組溝 SD6701 の西延長部を確認した。SD6701 は SB0934 を避けるように北へ屈曲しており、その位置関係から、SB0934 に伴う雨落ち溝として同時期

表１　飛鳥宮跡における主要建物の規模

地区	遺構番号	建物形式	平面形式	棟方向	柱		桁行		梁行	
					平面	深さ	間数	総長	間数	総長
外郭	SB0934	側柱	四面廂	東西棟	1.5 ～ 1.7 m	1.5 ～ 2 m	11 間	35.4 m	5 間	15 m
外郭	SB02402	総柱	四面廂	東西棟	1.7 m	1.4 m	11 間	35.4 m	5 間	15 m
内郭	SB6215	側柱	南北廂	東西棟	1.2 ～ 1.5 m	—	7 間	19.4 m	2 間	5.4 m
内郭	SB6405	側柱	南北廂	東西棟	1.2 ～ 1.5 m	—	6 間	16.9 m	4 間	10.5 m
内郭	SB6010	側柱	南北廂	東西棟	1.2 ～ 1.3 m	1 m	7 間	19.2 m	4 間	11.2 m
内郭	SB0301・0501	側柱	南北廂	東西棟	1.5 ～ 2 m	1.5 m	8 間	23.5 m	4 間	12.2 m
内郭	SB7910	側柱	四面廂	東西棟	0.8 ～ 1.7 m	—	7 間	20 m	4 間	11.2 m
エビノコ郭	SB7701	側柱	四面廂	東西棟			9 間	29.2 m	5 間	15.3 m

に機能していたと考えられる。

近年の調査へ　165 次調査によって、それまで大規模な建物の存在が想定されていなかった外郭地区に、内郭の主要建物を上回る大規模建物が存在する可能性が示された。一方、調査区が狭小であったため、SB0934 の全体規模や周辺遺構の構成には不明な点が残された。そこでその全体規模と周辺施設の配置を明らかにするため、令和４～６年度に一連の発掘調査を実施した。

３．令和４～６年度の発掘調査

（１）189 次調査（令和４年度）　Ⅲ期遺構内郭北辺の北側に調査区を設定し（図２中央左）、内郭北辺を画する北一本柱列 SA5901 の西延長部分と、その周辺に展開する遺構群の様相を確認することを目的として実施した（鈴木 2023）。

北一本柱列 SA5901　調査区南端で SA5901 の西延長部分８間分（約 20 m）を検出した。柱間寸法は約 2.7 mを測る。

掘立柱建物 SB02201　調査区北東部で検出した東西棟建物である。柱穴８基を検出し、桁行３間（約 10 m）以上、梁行２間（約６m）の規模をもつ。柱間寸法は桁行方向で約３mを基本とするが、桁行両脇間のみ約4.2 mと広くなる。柱掘方は一辺約1.2 ～ 1.5 mを測る。SB02201 は 13 次調査で検出された SB6715 と南北柱筋および柱間構成が概ね一致することから、同一建物と考えられる。また、柱筋は SB0934 とも一致する。

掘立柱塀 SA02202　SB02201 の西側柱筋に対応する南北方向の柱列である。柱穴３基、２間分（約 4.8 m）を検出した。柱掘方は一辺１～ 1.5 m、深さ約 0.8 mである。柱間寸法は約 2.4 mを測る。

（２）190 次調査（令和５年度）調査区は 189 次調査区の南側に位置し、７・21 次調査区と重複する（図２下）。既知の遺構を再確認するとともに、より精度の高い記録を作成することで、周辺で検出されている遺構との位置関係を明らかにすることを目的として実施した（宇野ほか 2025）。

石組溝 SD5902　調査区北側で東西 14 m分を再検出した。幅約 0.5 mで、北一本柱列 SA5901 に沿ってその南側に設けられており、位置関係から SA5901 に伴う雨落ち溝と考えられる。

掘立柱建物 SB6215・SB6510　調査区中央部で、掘立柱建物 SB6215・SB6510 を再検出した。SB6215 は周辺の調査成果とあわせると、桁行７間（約 19 m）、梁行２間（約 5.4 m）で、南北両側に廂を伴う東西棟建物である。SB6510 は桁行５間(約 12 m）以上、梁行２間（約 5.4 m）の東西棟で、廂を伴わない側柱建物である。両建物とも柱掘方は一辺約 1.2 ～ 1.5 m、柱間寸法は約３mを基本とし、柱筋を揃えて規則的に配置される。いずれも正方位をとり、Ⅲ期遺構に属する。

掘立柱塀 SA02301　柱筋が東に対して北に約 25°振れる掘立柱塀である。13 間分(約 35 m)を検出し、柱掘方は一辺約 1.2 ～ 1.5 m、柱間寸法は約 2.7 mを測る。柱抜取穴の埋土にⅠ期遺構に特徴的な焼土や炭化物を顕著に含むことに加え、柱列の方向や他の遺構との重複関係から、Ⅰ期遺構に属する。

溝 SD02302　SA02301 の南側を並行する素掘り溝で、幅約1 m、検出長約 21.5 mを測る。SA02301 との距離は芯々で約 4.5 mである。埋土には焼土や炭化物を含み、SA02301 の柱抜取穴埋土と共通する特徴を示す。

（３）191 次調査（令和６年度）165 次調査区南側の地点（図２上部）で、大型掘立柱建物 SB0934 の平面規模を確認することを目的として実施した（東影 2026）。

大型掘立柱建物 SB0934　建物南東部を検出し、165 次調査の成果とあわせて、SB0934 が桁行 11 間（約 35.4 m）、梁行５間（約 15 m）の四面廂建物であることが確定した。身舎（もや）の柱掘方は一辺約 1.7 m、深さ約２m、廂では一辺約 1.5 m、深さ約 1.5 mを測り、柱間寸法は約３mを基本とするが、桁行両脇間のみ約 4.2 mと広くなる特徴をもつ。

掘立柱建物 SB02402　SB0934 の南約 2.4 mで、新たに総柱の掘立柱建物 SB02402 を検出した。東西７間以上、南北４間以上で、柱掘方は一辺約 1.7 m、深さ約 1.4 mを測る。柱間寸法は約３mを基本とし、SB0934 の両脇間に対応する位置では約 4.2 mとなる。SB02402 は SB0934 と柱筋・柱間寸法が一致し、東西規模も同様に 11 間となる可能性が高い。

４．調査成果からみた宮殿遺構

（１）Ⅲ期遺構の様相　189 ～ 191 次調査によって、SB0934 の規模が確定するとともに、その周辺に SB02402、SB02201・SB6715 などの建物が展開することが明らかとなった（図３左）。これらの

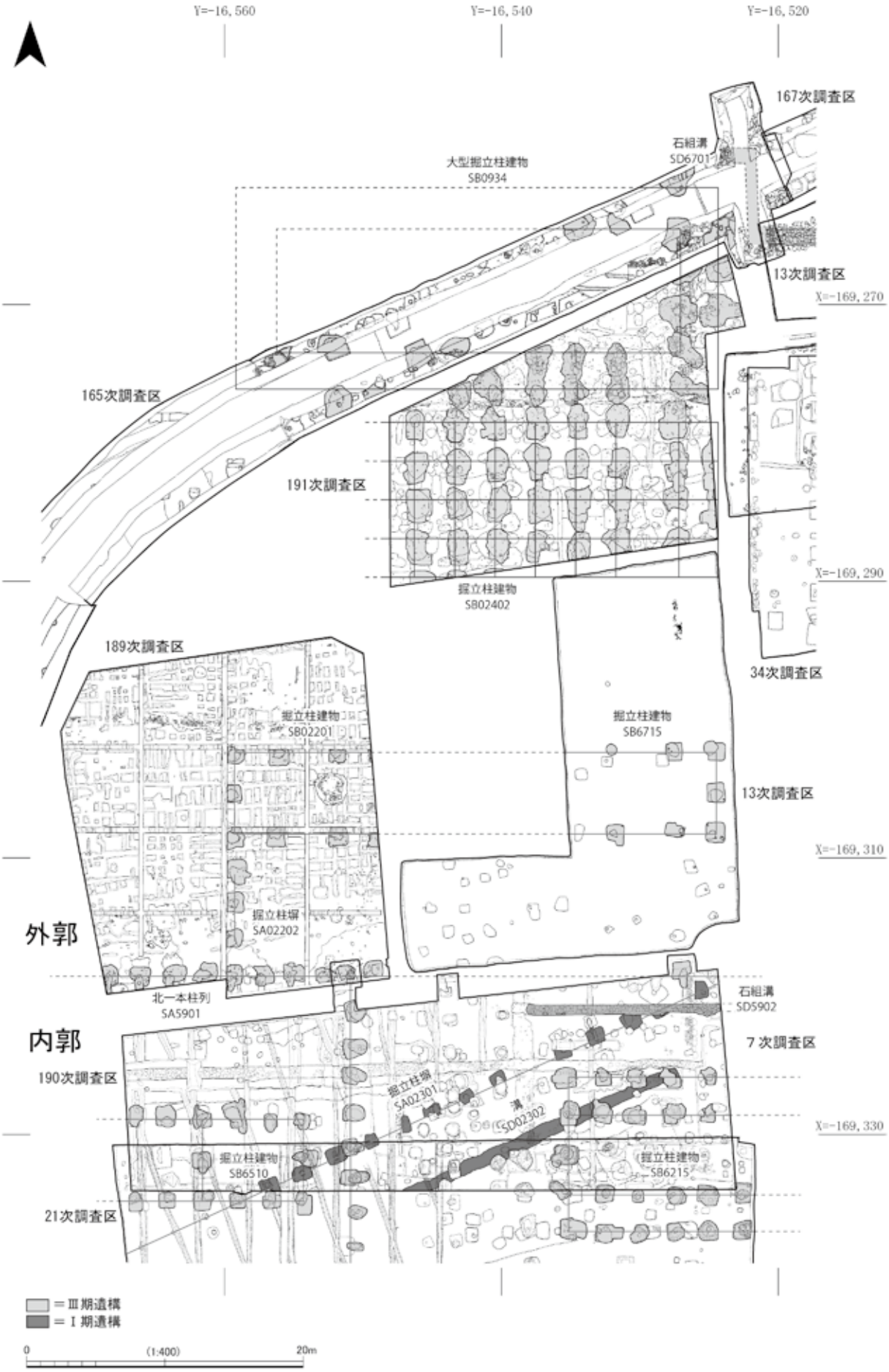


図２　内郭北西部及び外郭部分の検出遺構平面図（S ＝ 1 ／ 400）

成果により、SB0934 を中心とする外郭地区の建物配置を具体的に検討することが可能となった。

（2）Ⅰ期遺構の発見　190 次調査で確認した掘立柱塀 SA02301 と溝 SD02302 は、重複関係や造営方位などからⅠ期遺構と考えられる。Ⅲ期遺構の下層に存在するⅠ期遺構は、これまで断片的な確認にとどまっており、特に区画施設とみられる SA02301 の発見は、Ⅰ期における空間構成や土地利用を検討するうえで重要な成果である。

5．外郭建物群を考える

特　徴　SB0934 は、桁行 11 間、梁行 5 間の四面廂建物で、飛鳥宮跡でも最大級の規模を有する。柱間寸法は約 3 m（10 尺）を基本とし、桁行両脇間のみ約 4.2 m（14 尺）と広くなる。この柱間構成は、SB0934 と中軸線をそろえる SB02402 のほか、SB02201・SB6715 にも共通する（図 3 左）。これらは、SB0934 を中心に共通した規格のもとで配置された建物群と考えられる。

立　地　外郭建物群は、小字「フケ」と呼ばれる一帯を避けるように展開している（図 4）。「フケ」の地名が水はけが悪い土地に由来することから、この一帯は低湿地であったと推定され、その立地は旧地形に一定の規制を受けていた可能性がある。建物相互の配置には計画性が認められる一方、建物群全体の立地には周辺の地形条件も関わっていたと考えられる。

類　例　この建物群と類似するのが、平城宮跡内裏の建物である（図 3・表 2）。内裏Ⅰ期の御在所正殿 SB4700 は、桁行 11 間、梁行 5 間の四面廂建物で、両脇間のみ柱間を広くとる点で SB0934 と共通する（宮本編 1991）。その南側には中軸線をそろえて細殿 SB4640 と SB460 が配置されており（図 3 右）、大型建物を中心とする建物配置にも共通性が認められる（鈴木 2026）。さらに、こうした建物構成がその後、複数時期にわたって認められ、内裏の中心部に位置することも注目される（図 5）。

位置づけ　具体的な機能の特定には至らないものの、SB0934 を中心とする建物群は、その規模や規格性、平城宮跡内裏との共通性から、飛鳥宮の中でも重要な機能を担った建物群であった可能性が高い。今後、藤原宮・平城宮との比較を進め、外郭建物群が飛鳥宮において担った役割を検討する必要がある。

6．おわりに

近年の調査により、SB0934 を中心とする外郭建物群の解明が進むとともに、再調査によってⅠ期遺構も新たに確認された。一方､外郭建物群の役割や、旧地形と宮殿造営との関係など、飛鳥宮の空間構成とその変遷にはなお多くの課題が残されている。

かつて宮殿が営まれたこの地は、いま田園となり、穏やかな風景をとどめている。しかし、その地下には、宮殿の造営と改変を重ねた古代の人々の歩みが今なお刻まれている。今後も地道な調査と再検討を重ね、飛鳥宮の姿が徐々に明らかになることを期待したい。

【註】

（1）以下、飛鳥京跡の発掘調査については「飛鳥京跡」を省略し、調査次数のみを記す。

【主要参考文献】

宇野隆志・黒澤ひかり 2025「史跡　飛鳥宮跡（飛鳥京跡第 190 次調査）」『奈良県遺跡調査概報 2023 年度』（第二分冊）、奈良県立橿原考古学研究所

岡田雅彦・北将伍 2026「史跡　飛鳥宮跡（飛鳥京跡第 192 次調査）」『大和を掘る 41』、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館

菅谷文則･松田真一 1978「飛鳥京跡昭和 52 年度調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1977 年度』奈良県立橿原考古学研究所

鈴木一議 2023「飛鳥京跡第 189 次調査」『奈良県遺跡調査概報 2022 年度』（第二分冊）、奈良県立橿原考古学研究所

鈴木一議 2026「飛鳥宮跡における最近の発掘調査成果とその検討」『条里制・古代都市研究』第 41 号、条里制・古代都市研究会

鶴見泰寿編 2014『飛鳥京跡Ⅵ－吉野川分水の発掘調査－』、奈良県立橿原考古学研究所

東影悠 2026「史跡　飛鳥宮跡（飛鳥京跡第 191 次調査）」『奈良県遺跡調査概報 2024 年度』（第二分冊）、奈良県立橿原考古学研究所

宮本長二郎編 1991『平城宮発掘調査報告ⅩⅢ』奈良国立文化財研究所学報第 50 冊、奈良国立文化財研究所

【図表出典】

図 1　明日香村地形図（2017）をもとに筆者作成

図 2　東影（2026）をもとに筆者作成

図 3　東影（2026）、宮本編（1991）をもとに筆者作成

図 4　奈良国立文化財研究所作成地形図 1：2,000「飛鳥」『奈良盆地南部』をもとに筆者作成

図 5　宮本編（1991）をもとに筆者作成

表 1・2　筆者作成

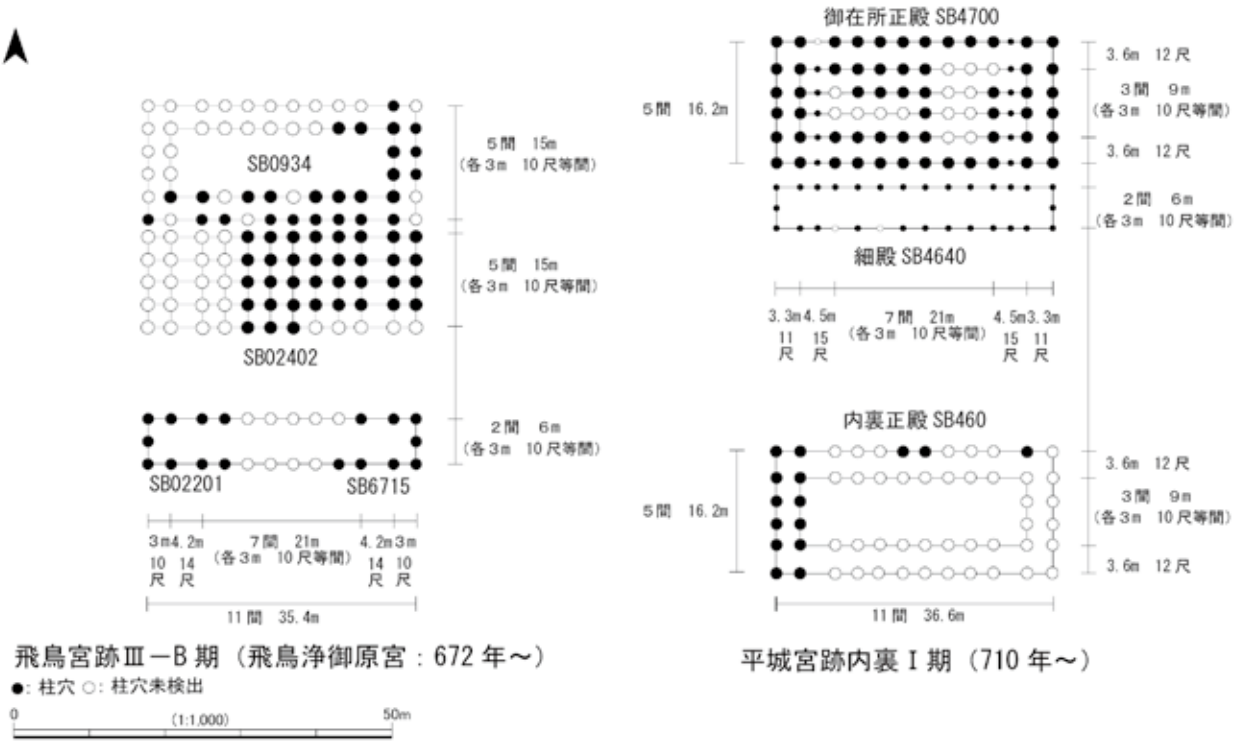


図３　飛鳥宮跡Ⅲ期外郭遺構復元図（左）平城宮跡内裏Ⅰ期遺構復元図（右）（S ＝ 1 ／ 1,000）

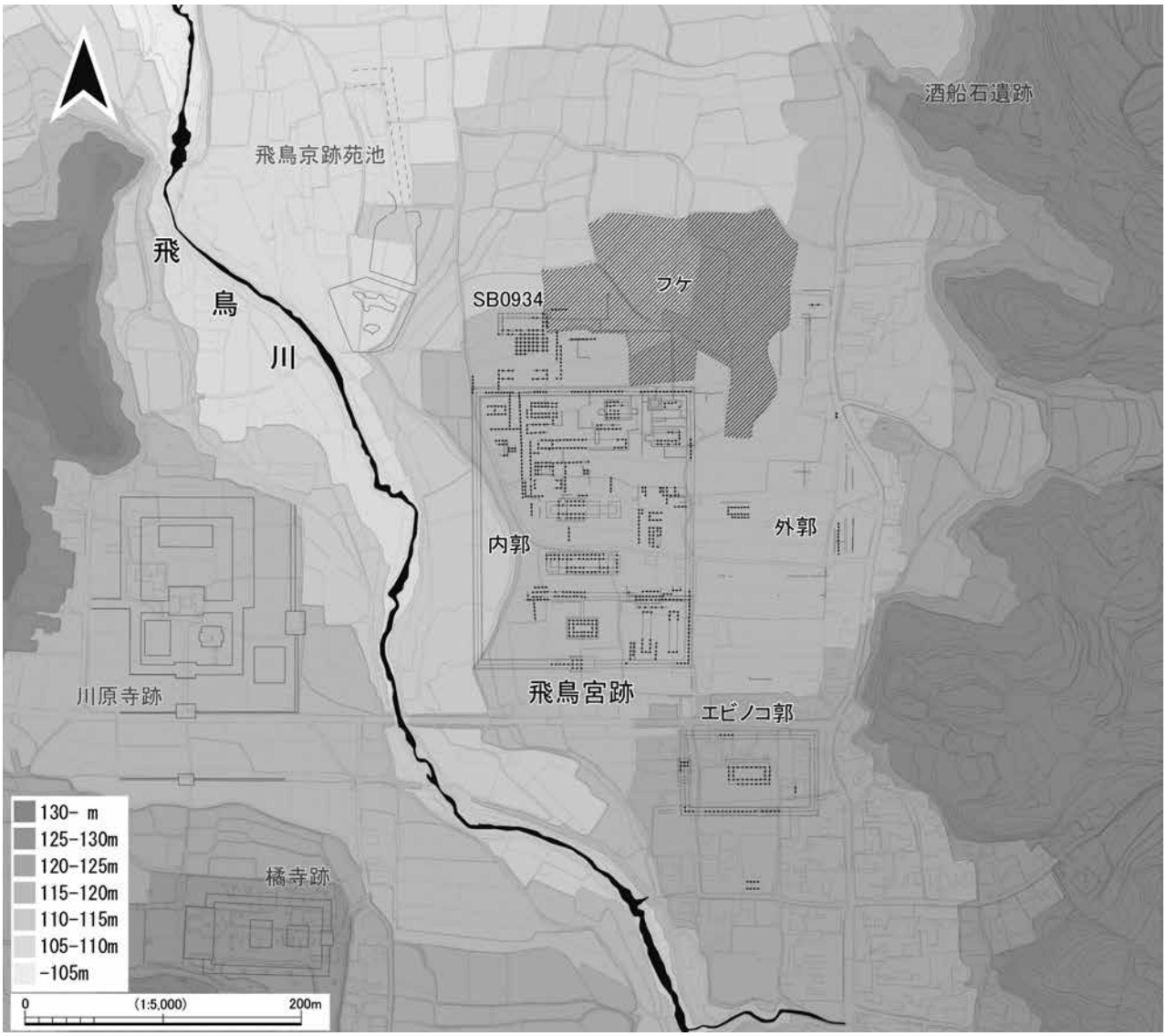


図４　飛鳥宮跡周辺の地形と遺構配置の関係（S ＝ 1 ／ 5,000）

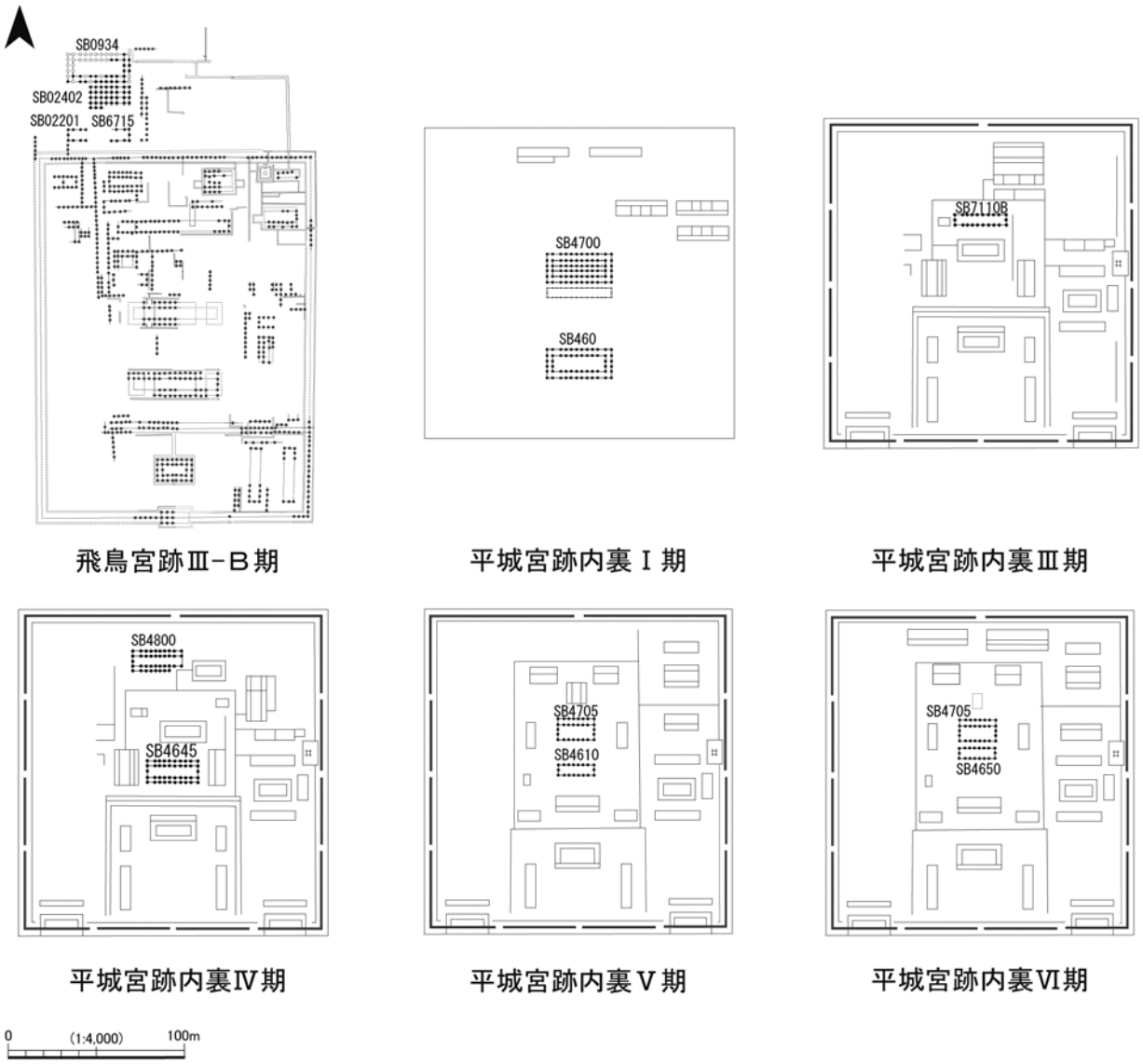


図５　飛鳥宮跡Ⅲ期内郭及び外郭遺構群復元配置図、平城宮跡内裏Ⅰ・Ⅲ～Ⅵ期遺構復元周辺配置図（S ＝ 1 ／ 4,000）

表２　脇間を持つ構造の建物

遺跡	地区	時期	遺構番号	平面形状	棟方向	建物の規模								
						桁行					梁行			
						間数	身舎	脇間	廂	総長	間数	身舎	廂	総長
飛鳥宮跡	外郭	Ⅲ-B 期	SB0934	四面廂	東西棟	11 間	3 m	4.2 m	3 m	35.4 m	5 間	3 m	3 m	15 m
飛鳥宮跡	外郭	Ⅲ-B 期	SB02402	四面廂	東西棟	11 間	3 m	4.2 m	3 m	35.4 m	5 間	3 m	3 m	15 m
飛鳥宮跡	外郭	Ⅲ-B 期	SB02201・SB6715	無廂	東西棟	11 間	3 m	4.2 m	–	35.4 m	2 間	3 m	–	6 m
平城宮跡	内裏	Ⅰ期	SB4700	四面廂	東西棟	11 間	3 m	4.5 m	3.3 m	36.6 m	5 間	3 m	3.6 m	16.2 m
平城宮跡	内裏	Ⅰ期	SB460	四面廂	東西棟	11 間	3 m	4.5 m	3.3 m	36.6 m	5 間	3 m	3.6 m	16.2 m
平城宮跡	内裏	Ⅲ期	SB7110B	無廂	東西棟	9 間	3 m	4.5 m	–	30 m	2 間	3 m	–	6 m
平城宮跡	内裏	Ⅳ期	SB4645	南北二面廂	東西棟	9 間	3 m	4.5 m	–	30 m	4 間	3 m	3 m	12 m
平城宮跡	内裏	Ⅳ期	SB4800	南北二面廂	東西棟	9 間	3 m	4.5 m	–	30 m	4 間	3 m	3 m	12 m
平城宮跡	内裏	Ⅴ期	SB4610	無廂	東西棟	7 間	3 m	3.6 m	–	22 m	2 間	3 m	–	6 m
平城宮跡	内裏	Ⅴ・Ⅵ期	SB4705	北方廂	東西棟	7 間	3 m	3.6 m	–	22 m	4 間	3 m	3.6 m	12.6 m
平城宮跡	内裏	Ⅵ期	SB4650	無廂	東西棟	7 間	3 m	3.6 m	–	22 m	2 間	3 m	–	6 m
平城京左京三条二坊	–	A・B 期	SB4500	南北二面廂	東西棟	7 間	3 m	4.2 m	–	23.4 m	5 間	3 m	–	15 m

藤原宮跡における近年の調査成果と意義

奈良文化財研究所　研究員　岩永 玲

1．はじめに

藤原宮は天武天皇の治世に構想され、その後、持統・文武・元明天皇の3代にわたって機能した（694～710年）。16年に満たない短命の宮であったが、この間、大宝律令の制定（701年）により律令国家の枠組みが一通り整えられ、古代国家の形成過程において極めて重要な役割を果たした。

これまでの調査研究　この藤原宮に関する学術研究は、江戸時代半ばに始まり、1930年代の日本古文化研究所による発掘調査や1960年代の奈良県教育委員会による発掘調査を経て、1969年から奈良国立文化財研究所（現在は奈良文化財研究所）が継続的な発掘調査を実施している。2026年現在、宮域の約14%が既発掘地となっている。

複数機関による調査の結果、藤原宮が「新益京」（藤原京）の中心に位置し、宮の南北中軸線上に北から内裏・大極殿院・朝堂院・朝集院を、それらの周囲に官衙区画を配置することが判明している（図1）。このうち、近年の継続的な調査により特に理解が深まりつつあるのが大極殿院である。

大極殿院については、日本古文化研究所の調査で大枠の復元がなされたが、当時の調査はごく部分的なものであったため、さまざまな点で検証が必要であった。そこで1977年以降、その復元案の検証と全体像の解明を目指し、奈良文化財研究所が継続的に発掘調査を進めてきた。その成果は多岐にわたるが、ここでは大極殿院の構成そのものの理解を変えた大極殿後殿の発見に焦点をあて、その内容と意義、課題について述べる。

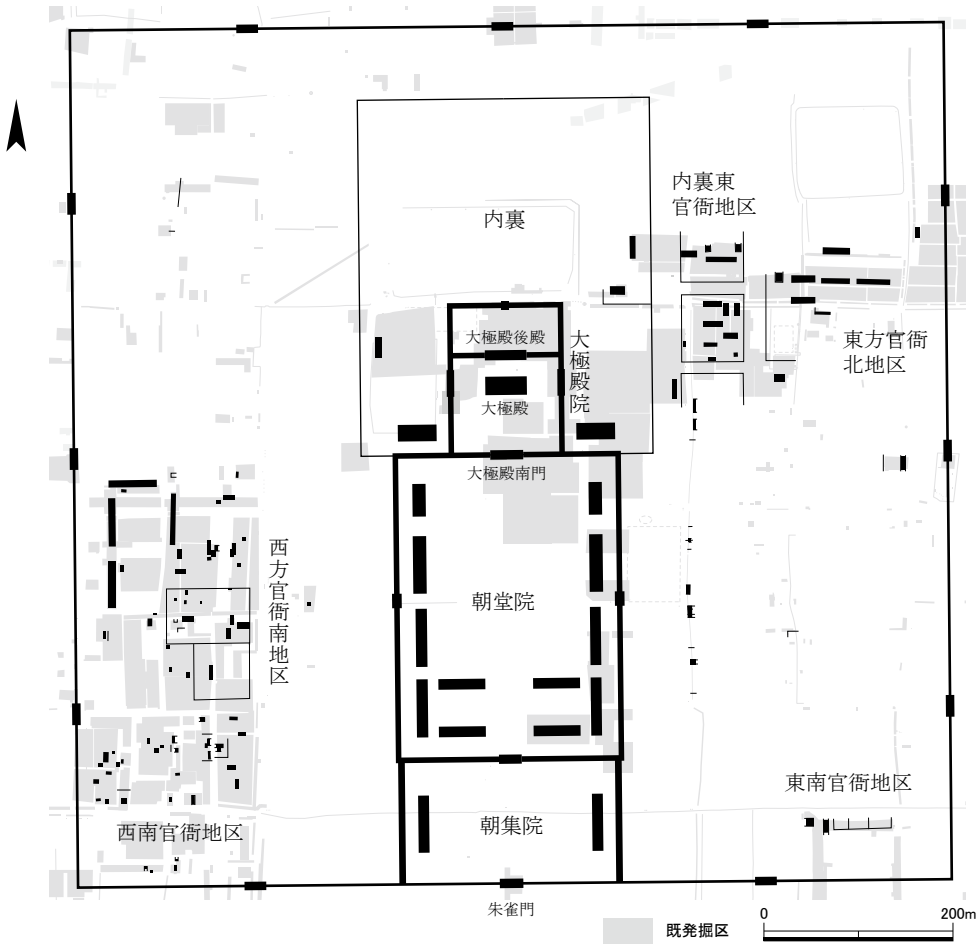


図1　藤原宮の構造（S=1／8,000）

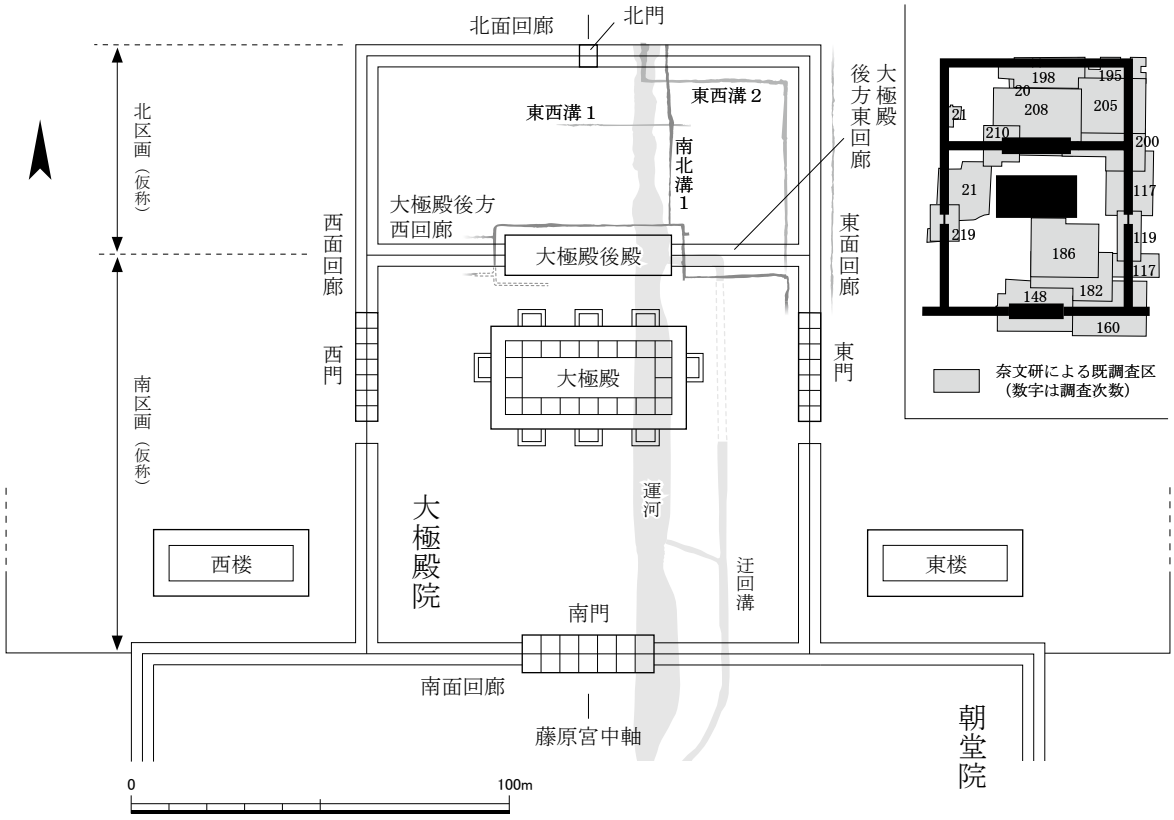


図２　藤原宮大極殿院の主要遺構（S=1 ／ 2,000）

２．大極殿院の基本構造

本題に入る前提として、大極殿院の基本構造を確認しておく（図２）。

大極殿院は、元日朝賀・即位儀などの最重要儀礼に際して天皇が出御した空間である。内裏の南に位置し、東西約 120 m、南北約 160 mの回廊に囲まれた空間を形成する。この空間は東西方向の回廊（大極殿後方回廊）によって南北に二分されており、南側の区画（以下、南区画と仮称）内に天皇が出御する大極殿が、大極殿後方回廊の中央に天皇出御に際しての控室とみられる大極殿後殿が存在する。四周を囲む回廊には各辺１つの門が開くが、このうち南辺中央に設けられた大極殿南門は、天皇の空間である大極殿院と臣下の空間である朝堂院を結ぶ重要な施設であり（橋本 1995）、宮・京の中心に計画的に配置されている（小澤 2023）。

３．大極殿後殿の発見

以上が大極殿院の構造に関する現在の理解であるが、近年に至るまで大極殿後殿の存在は明確となっていなかった。

大極殿後殿とは　正殿である大極殿の後方（北方）に設けられる施設であり、現時点においてその定義を示すことは難しいが、後世の事例から、前述のように天皇が大極殿に出御する際の控室としての機能を有したと推測されている。

日本古文化研究所の調査時には、大極殿跡のすぐ北に建っていた小学校校舎によって調査範囲が限定されたこともあり、大極殿院の内部では大極殿のみを確認していた。その後、小学校の移転を経て、1977 年に奈良国立文化財研究所が大極殿北方を広く調査することとなったが、この時は、結果的に後殿に相当する建物の明確な痕跡を確認するには至らなかった（第 20 次調査）。当該調査では、建物に付随した可能性がある遺構の存在や、大極殿後方に建物を配するに十分な空間があることから、後殿の存否については結論を保留としたものの、その後 40 年あまりにわたって、大極殿院内に大極殿が単独で存在するというイメージが定着することになった。

前期難波宮との類似点と相違点　ところが 2019 年、大極殿の後方を画する大極殿後方回廊（図２）の発見により、大極殿院が南北２つの区画からなることが判明した（第 200 次調査）。同様の構造は、かねてより藤原宮大極殿院との規模・構造の類似性が指摘されている前期難波宮（藤原宮に先行する宮）の内裏前殿区画でも確認されており（図３）、上記の発見によって両者の構造にみえる類似性はより明

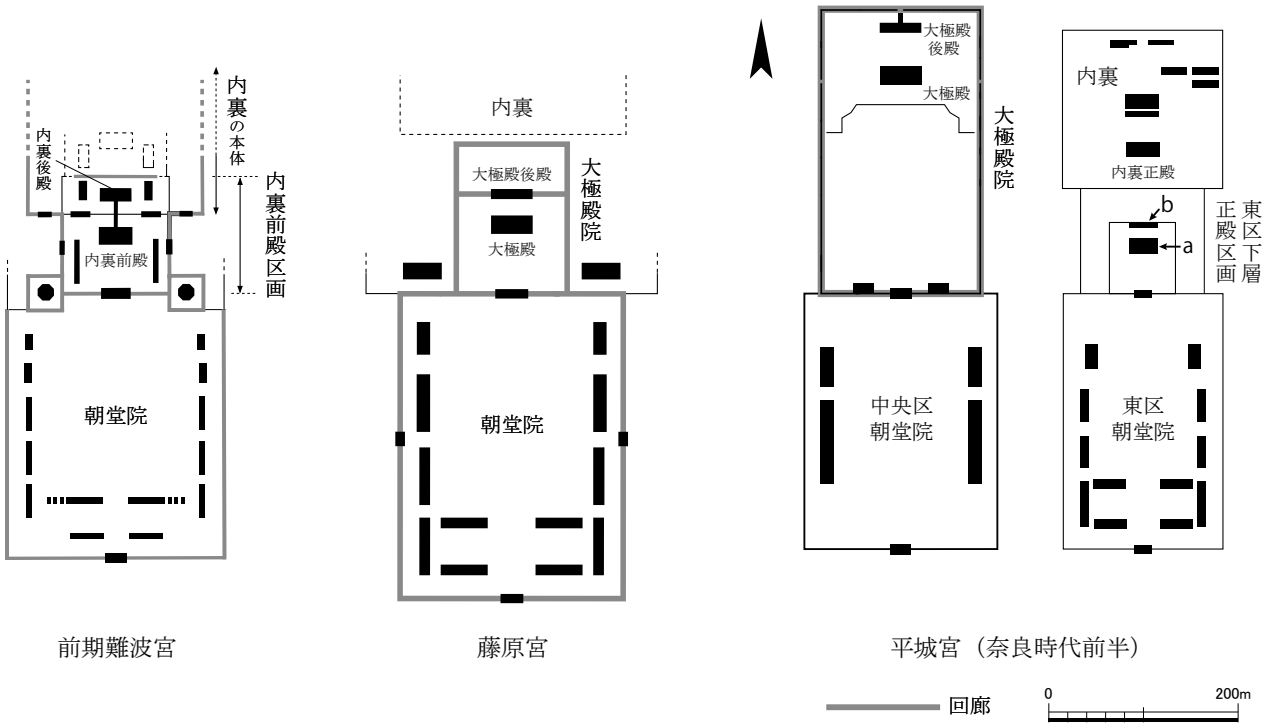


図３　前期難波宮・藤原宮・平城宮（奈良時代前半）における中枢部の構造（S=1 ／ 8,000）

確となった。この前期難波宮内裏前殿区画では、大極殿の前身といえる内裏前殿の後方を画する掘立柱塀より北側の区画内で内裏後殿やその脇殿を確認していることから（図３）、藤原宮大極殿の後方を画する大極殿後方回廊より北側の区画（以下、北区画と仮称）内にも後殿をはじめとする何らかの施設が存在した可能性が改めて浮上した。そこで後方回廊の北方を再度調査したが、結果的に北区画内には前期難波宮でいう内裏後殿やその脇殿に相当する建物は無いことが判明した（第 205・208 次調査）。

後方回廊の中央で新たに基壇を発見　一方で、後方回廊の中央に当該回廊よりも幅の広い基壇が存在することが判明した（図２、図４：基壇の断面に層状の積み土が明瞭にみえる）。この基壇の上面では、建物の柱を据え付けた痕跡の可能性がある集石遺構を１箇所しか確認していないが、通常、造営の終盤に整備される基壇外装の痕跡を検出したことや（図５）、基壇周辺でまとまった数の瓦が出土したことから（図６）、基壇上には瓦葺の礎石建物があったと推定できる（第 210 次調査）。また、この基壇は大極殿の基壇と東西規模がほぼ同じであることから、その上部に推定される建物の東西規模も大極殿に匹敵するとみられる。大極殿の後方に位置する点も踏まえると、当該基壇とその上に建つ建物は大極殿後殿とみて間違いない。こうして、藤原宮大極殿後殿の存否を確認するという長年の課題が解決した。

４．大極殿後殿発見の意義

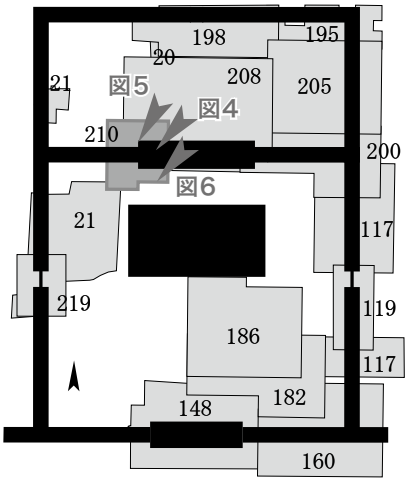
このように、近年の発掘調査により大極殿院の構成に関する理解は大きく変化したが、その最大の成果は、大極殿後殿の存在を確認した点ではなく、想定と異なる位置に後殿が設けられていたと判明した点にある。この意味するところは、前後の宮と構造を比較することによって説明できる。

計画変更の痕跡　藤原宮とそれに先行する前期難波宮の中枢部は、規模・構造ともに高い共通性を有しており（中尾 1995・2014）、藤原宮における大極殿後方回廊の検出によって、両者の関連性は一層強まった。この前提からごく自然に想定される藤原宮大極殿後殿の位置は、前期難波宮内裏後殿と同様に、正殿の後方に位置する区画（北区画）内ということになるが、実際はそうなっていない。ただし、この区画内では建物の造営を計画した痕跡とみられる東西溝１（図２：基壇の外形線として設定された溝の一部と考えられる）を検出していることから、当初は北区画内に建物を設ける計画があったものの、何らかの事情により造営には至らず、最終的に空閑地となった蓋然性が高い（奈文研 2022）。

平城宮への構造の継承と変化　この点は、藤原宮に後続する平城宮の構造（図３）からも裏付けることができる。平城宮には中央区・東区という２つの中枢施設があるが、このうち東区は、北から順に内裏、



図４　後殿の基壇とその断面（第 210 次調査、北東から）



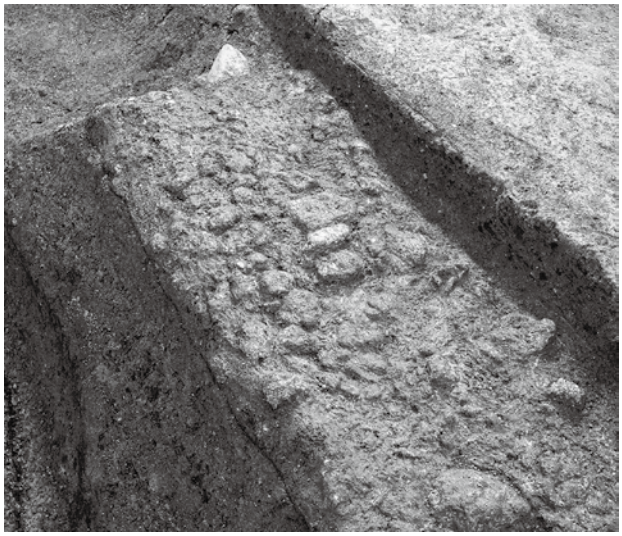


図５　後殿と後方回廊の接続部における基壇外装の痕跡
（第 210 次調査、北東から）



図６　後殿の基壇周辺でみつかった瓦
（第 210 次調査、北東から）

天皇の出御空間（奈良時代前半は東区下層正殿区画と仮称しており、奈良時代後半は第二次大極殿となる）、十二朝堂を備えた朝堂院、朝集院を並べることから、かねてより藤原宮中枢部の構造を直接継承したものと理解されてきた。ここで奈良時代前半の東区下層正殿区画をみると、正殿（図３のａ）を中心に据えた区画の北辺に接して後殿（図３のｂ）を設けており、藤原宮大極殿院の南区画とほぼ同じ構成となっていることがわかる。つまり、藤原宮において生じた後殿の形態が平城宮にも踏襲され、同時に、藤原宮では意味をなさなくなった大極殿院北区画が平城宮において完全に取り払われたと理解することができる（廣瀬 2023）。

このように、藤原宮大極殿院の構成に対する理解が更新されたことで、前期難波宮内裏前殿区画から平城宮東区下層正殿区画へと至る過程で、大極殿院に相当する区画の構造が連続的に変化したことが、より明確に説明できるようになった。古代宮都の変遷過程を考えるうえで重要な成果といえるだろう。

５．計画変更の背景と後殿の評価

ところで、ここで大きな問題となるのが、藤原宮大極殿後殿の造営計画を変更した背景である。

中枢部造営の遅滞　現在この点に関しては、宮中枢部の造営が遅滞していたために、本来的には南・北の空間を繋ぐ門を配置すべき位置に門と一体化した後殿を置くことで造営の短縮化を図ったとする見解が提示されている（廣瀬 2023･2025）。宮中枢部（特に礎石建ち・瓦葺の儀礼空間）の造営が遅れていたことは、『日本書紀』『続日本紀』といった文献史料の記述や、朝堂院回廊の造営中に廃棄された木簡の年代を根拠に以前から指摘されていたが、中枢部を構成する１区画である大極殿院の中でも後殿・後方回廊の造営が輪をかけて遅れていたことが、近年の調査で判明した。上記の研究は、それを踏まえた見解である。

両施設の造営の遅れを示す証拠が、遺構の重複関係にあらわれる大極殿院の造営順序である。大極殿院の造営は、工事に先立って宮中軸付近に設けられた資材運搬用の運河（図２）を、運河から派生する迂回溝を設けつつ、順次埋め立てながら実施されたが、その埋め立て順序から、大極殿院の造営が南部域→北部域の順に進んだことが判明した。また、基壇建物の造営時に基壇裾に掘削された溝の重複関係から、大極殿院北部域の造営が北面回廊・東面回廊→後方回廊・後殿と進んだことも明確となった（図２：北面回廊・東面回廊の基壇造成中に機能した東西溝２と、後方回廊・後殿の基壇造成中に機能した南北溝１が重複し、後者が新しい）。

こうした調査所見から、造営の遅滞が計画変更に何らかの影響を及ぼした可能性は否定できない。ただし、この点が大極殿院という重要施設の構造を変更した根本的な原因であるかどうかについては、検討の余地がある。特定の儀式に間に合わせることが目的であれば、回廊内かつ大極殿の背後という臣下の目にふれにくい場所に後殿を置くことも踏まえ、当初計画の位置に仮設の後殿を設けることで対応することも可能と考えるからである。ここでは別の考え方として、藤原宮において大極殿院が内裏から独立したことを要因に挙げてみる（図３）。

内裏からの大極殿院の分離　遡って前期難波宮では、内裏前殿区画を成す南側の区画は、その北側にある内裏本体とは掘立柱塀で画されていたものの、両者は一連の回廊で囲まれていた。また内裏前殿は、内裏本体の中心施設である内裏後殿と廊で結ばれていた。つまり、内裏前殿区画を成す南側の区画は、内裏本体と一体の存在であった。このとき内裏後殿は、「内裏（本体）の正殿」「内裏前殿の後殿」という二重の性格をもっていたといえる。

一方、藤原宮では、大極殿院は四周を回廊で囲む単独の院となり、さらに内裏の南端よりも南に位置すると想定されることから、内裏から分離した存在になったと考えられる。このように内裏から大極殿院が分離すると（直木 1975）、前期難波宮内裏後殿の系譜を引く殿舎は内裏の内側に収まって、「内裏前殿の後殿」という性格から脱却した純粋な「内裏の正殿」となり（中尾 2014）、もはやそれに匹敵する大型殿舎を大極殿院北区画内に設ける必要はなくなる。それと同時に、内裏から独立した大極殿に天皇が出御する際の控室としての後殿を設ける必要が生じ、当時の造営状況を踏まえつつ最も合理的な出御動線を確保した位置（大極殿に近接する後方回廊の中央）に大極殿後殿を据えた。

具体的に述べると、発掘調査の所見から、北面回廊が完成し後方回廊の基壇造成に着手する前後で北区画内に建物を設ける計画がとりやめになった蓋然性が高い。憶測ではあるが、この時点で内裏からの大極殿院の分離が決まったのではないだろうか。結

果として、大極殿院北区画は無意味なものとなった。

このように理解すると、藤原宮大極殿後殿は前代の宮における特定の殿舎の系譜を引くのではなく、藤原の地で創出されたものと評価できる。ただし、以上は藤原宮における内裏の実態が未確認である現時点での推測に過ぎず、発掘に基づく検証が不可欠であることはいうまでもない。

6．おわりに―今後の課題―

本報告では、古代宮都の変遷を考えるうえで重要な所見を得た藤原宮大極殿院における近年の調査を取り上げ、その成果や意義について述べた。日本古文化研究所によって復元案が提示されたのち、数度におよぶ再調査を経てようやく大極殿後殿の検出に至ったわけであるが、その背後に、数十年におよぶ宮都研究の蓄積や発掘調査技術の向上があったことは言をまたない。

一方で、課題も多く残されている。前述のように、宮域に占める既調査地の割合は２割に満たず、特に大極殿院の評価と密接に関わる内裏や７世紀最大の規模を有する官衙域の実態が明確でないことは、古代宮都における藤原宮の位置づけを考えるうえで必要な考古学的情報が圧倒的に不足していることを意味する。また、実態の解明が進んできた大極殿院においても、面的な調査が実施されていない大極殿の詳細な規模・構造や、大極殿と大極殿後殿を結ぶ軒廊の有無をはじめ、古代宮都構造の変遷を考えるうえで極めて重要な要素が依然判明していない。

こうした状況から、藤原宮に対する歴史認識を常に更新し、その学術的価値をより明確にするためには、今後も継続的に発掘調査・研究を実施していくことが不可欠といえる。それと同時に、人類共有の財産である遺跡の学術的価値や調査・研究によって構築された新たな歴史認識を、広く社会に還元するとともに将来に継承し、より豊かな人間活動の糧とするため、調査成果の公開・発信に尽力することも調査機関の責務である。「飛鳥・藤原の宮都」が世界遺産に登録され、当該遺跡に対する社会の関心が高まっている今日、その重要性は一層増大しているといえるだろう。

【主要参考文献】

飛鳥資料館 1984『藤原宮―半世紀にわたる調査と研究』

足立康・岸熊吉 1936『藤原宮発掘調査報告一』日本古文化研究所

今泉隆雄 1993『古代宮都の研究』吉川弘文館

今泉隆雄 1997「権力表象としての古代宮都」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 74 集、国立歴史民俗博物館

海野聡・李陽浩編 2026『前期難波宮・藤原宮の儀礼と空間構成（シリーズ 宮殿研究の最前線 2)』八木書店

大澤正吾・村田泰輔 2020「藤原宮下層運河 SD19001A の検討―第 198 次」『奈良文化財研究所紀要 2020』

小澤毅 2003『日本古代宮都構造の研究』青木書店

小澤毅 2023『古代大和の王宮と都城』同成社

直木孝次郎 1975『飛鳥奈良時代の研究』塙書房

中尾芳治 1995『難波宮の研究』吉川弘文館

中尾芳治 2014「難波宮から藤原宮へ―日本古代宮都の成立過程をめぐって―」中尾芳治・栄原永遠男編『難波宮と都城制』吉川弘文館

奈良文化財研究所 2020「藤原宮大極殿院の調査―第 200 次」『奈良文化財研究所紀要 2020』

奈良文化財研究所 2021「藤原宮大極殿院の調査―第 205 次」『奈良文化財研究所紀要 2021』

奈良文化財研究所 2022「藤原宮大極殿院の調査―第 208 次」『奈良文化財研究所紀要 2022』

奈良文化財研究所 2023「藤原宮大極殿院の調査―第 210 次」『奈良文化財研究所発掘調査報告 2023』

橋本義則 1995『平安宮成立史の研究』塙書房

廣瀬覚 2023「藤原宮中枢部の構造―大極殿院を中心に―」『考古学ジャーナル』第 778 号、ニュー・サイエンス社

廣瀬覚 2025「藤原宮大極殿後殿の発見とその意義」城倉正祥編『生と死の儀礼空間―日中の都城・陵墓・寺院の発掘事例から―』早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所

【図版出典】

図１　奈良文化財研究所作成図を改変

図２　奈良文化財研究所作成図を改変、加筆

図３　調査機関刊行の報告書などにもとづき筆者作成
平城宮大極殿後殿の理解は小澤（2023）に拠る

図４～６　栗山雅夫（奈良文化財研究所）撮影

世界文化遺産「飛鳥・藤原の宮都」



飛鳥の宮都
(588 – 694 CE)

藤原の宮都
(694 – 710 CE)

宮殿・官衙跡

001 あすかきゅうせき 飛鳥宮跡
002 あすかきょうあとえんち 飛鳥京跡苑池
003 あすかみずおちいせき 飛鳥水落遺跡
004 さかふねいしいせき 酒船石遺跡
013 ふじわらきゅうせき 藤原宮跡

仏教寺院跡

005 あすかでらあと 飛鳥寺跡
006 たちばなでらあと 橘寺跡
007 やまだでらあと 山田寺跡
008 かわらでらあと 川原寺跡
009 ひのくまでらあと 檜隈寺跡
014 だいかんだいじあと 大官大寺跡
015 もとやくしじあと 本薬師寺跡

墳墓

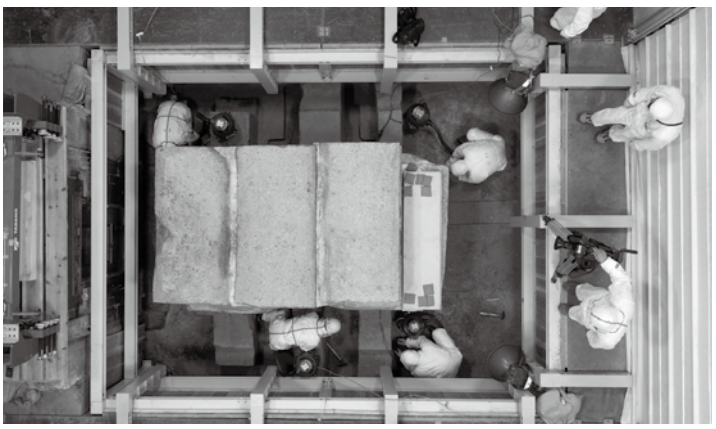
016 てんむ・じとう 天武・持統 てんのうりょうこふん 天皇陵古墳
010 いしぶたいこふん 石舞台古墳
011 しょうぶいけこふん 菖蒲池古墳
012 けんごしづかこふん 牽牛子塚古墳
017 なかおやまこふん 中尾山古墳
018 きとらこふん キトラ古墳
019 たかまつづかこふん 高松塚古墳

「飛鳥・藤原の宮都」構成資産の所在地（左図：若杉智宏作成、右図：世界遺産「飛鳥・藤原」協議会作成図を参考に作成）

発掘調査でみる「飛鳥・藤原の宮都」

013 ふじわらきゅうせき 藤原宮跡 →表紙　001 あすかきゅうせき 飛鳥宮跡 →裏表紙

019 たかまつづかこふん 高松塚古墳　左：石室解体取り上げ作業（俯瞰）2007 年。奈文研提供。
右：修復が完了した西壁女子群像。2020 年。文化庁・奈文研提供。





002 あすかきょうあとえんち
飛鳥京跡苑池　水を湛えた南池南半部（北から）1999 年。橿考研提供。



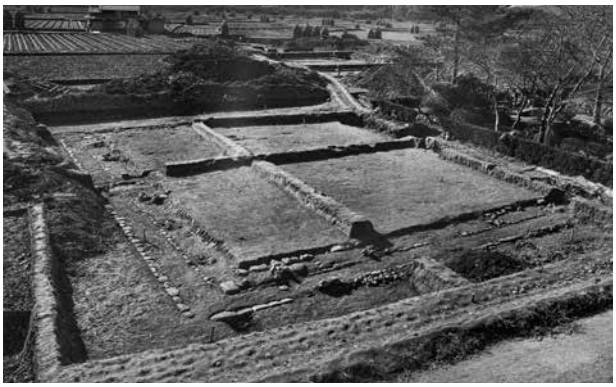
003 あすかみずおちいせき
飛鳥水落遺跡　礎石建物基壇（北西から）1982 年。奈文研提供。



004 さかふねいしいせき
酒船石遺跡　奥から湧水施設、船形石槽、亀形石槽（北から）2000 年。奈文研提供。



005 あすかでらあと
飛鳥寺跡　東金堂全景（南東から）1956 年。奈文研提供。



006 たちばなでらあと
橘寺跡　版築と基壇の石材が残る塔基壇の南東隅（東から）1985 年。橿考研提供。



007 やまだでらあと
山田寺跡　金堂全景（南から）1978 年。奈文研提供。



008 かわらでらあと
川原寺跡　西金堂（南西から）1957 年。奈文研提供。



009 ひのくまでらあと
檜隈寺跡　金堂跡（東から）1980 年。奈文研提供。



010 いしぶたいこふん
石舞台古墳
古墳全景（石舞台古墳周辺古墳群の調査時）（南西上空から）1976 年。橿考研提供。



011 しょうぶいけこふん
菖蒲池古墳
墳丘南西隅（南東から）2009 年。橿原市教育委員会提供。



012 けんごしづかこふん
牽牛子塚古墳
西面墳丘裾部（北西から）2010 年。明日香村教育委員会提供。



014 だいかんだいじあと
大官大寺跡
塔・東面回廊（東から）1978 年。奈文研提供。



015 もとやくしじあと
本薬師寺跡
中門（西から）1993 年。奈文研提供。



016 てんむ・じとうてんのうりょうこふん
天武・持統天皇陵古墳
古墳全景（南から）2024 年。世界遺産「飛鳥・藤原」協議会提供。



017 なかおやまこふん
中尾山古墳
墳丘と外周石敷き（東から）2020 年。明日香村教育委員会提供。



018 きとらこふん
キトラ古墳
墳丘南側（南から）2002 年。奈文研提供。



主催者紹介

奈良文化財研究所
Nara National Research Institute for Cultural Properties



ホームページ

文化財保存修復研究基金への寄付のお願い

奈良文化財研究所は文化庁の前身である文化財保護委員会の附属機関として、昭和 27 年（1952）に設立されました。古都奈良には多数の古建築や古美術品がのこることから、これらを総合的に研究することが設立の目的でした。そして、1960 年代からは、平城宮跡の保存問題を契機に、平城地区と飛鳥・藤原地区で宮跡等の発掘調査と研究を進めてきました。その成果は、古代都城の形成に関する国内外の研究や学術交流に活かされています。

また、国内外の文化財の保存・修復・整備に関する研究のほか、国内外の研究者に向けた研修を実施するとともに、各種データベース等を通じた多様な文化財情報の発信にも力を入れています。近年は大規模な地震や水害等で被害を受ける文化財のレスキューや災害データベースの作成など文化財防災についても積極的に取り組んでいます。

奈良県立橿原考古学研究所
Archaeological Institute of Kashihara,Nara prefecture

橿原考古学研究所は、橿原神宮外苑の整備に伴いおこなわれた橿原遺跡の発掘調査を契機に、末永雅雄博士（初代所長）によって昭和 13 年（1938）9 月 13 日に創設されました。昭和 26 年（1951）に県立機関となり、現在に至ります。

当研究所は、調査部［調査課（発掘調査・現地説明会の開催など）］、企画学芸部［企画課（普及活動・国際交流など）、資料課（資料管理）、保存科学センター（遺物の保存処理・科学分析など）、学芸課（附属博物館の展示・資料の活用など）］、附属博物館から構成され、考古学研究所と博物館が一体となった全国的にも数少ない研究機関です。これまで数多くの研究員が様々な研究を実施し、成果をあげてきました。また、国内に限らず、海外でも調査研究活動をおこなっています。



ホームページ

由良財団

公益財団法人 由良大和古代文化研究協会は、奈良県出身の哲学者・由良哲次氏による基金寄付に基づき、昭和 53 年（1978）9 月 9 日に設立されました。奈良県の文化財の調査研究と保存に資するという財団設立の目的に沿って、基金の運用により古代文化の調査や研究ならびにその助成、講演会や展覧会の開催、関連図書の出版などの普及啓発をはじめとした諸事業をおこなっています。

朝日新聞社

朝日新聞社は、文化財の価値を伝え、守ることに取り組んできました。昭和 47 年（1972）、高松塚古墳の極彩色壁画をカラー写真で報じ、飛鳥ブームを呼び起こしたのが原点の一つです。以来、世界遺産である東大寺大仏殿の昭和大修理や興福寺中金堂再建などを支援してきました。令和 7 年（2025）には、火災で焼損した金堂壁画の一般公開をめざし、同じく世界遺産の法隆寺と「法隆寺みらいプロジェクト」を始めました。翌年には文化庁、国立文化財機構と「文化財防災アクション」を始動し、災害への備えも呼びかけています。

奈良文化財研究所・奈良県立橿原考古学研究所　公開講演会資料

ここから日本の都城がはじまった

－発掘調査が解き明かす「飛鳥・藤原の宮都」－

発行年月日　令和８年 11 月３日

編集・発行　奈良文化財研究所
〒630-8577　奈良市二条町2-9-1
奈良県立橿原考古学研究所
〒634-0065　橿原市畝傍町１番地

印刷・製本　橋本印刷株式会社

＊表表紙写真：藤原宮大極殿院跡、南から。奈文研提供。
裏表紙写真：飛鳥宮跡南正殿跡、西から。橿考研提供。



飛鳥宮跡南正殿跡